



題字「ほねほねボード」前田路団員 作
 ホネホネ団通信 20号 2013年9月22日発行
 なにわホネホネ団事務局
 〒546-0034
 大阪市東住吉区长居公園 1-23 大阪市立自然史博物館
 TEL: 06-6697-6221 FAX: 06-6697-6225
 wadat@mus-nh.city.osaka.jp

なにわホネホネ団 10年の軌跡

2003年

6月 3日
 7月 7日

—なにわホネホネ団黎明期—

・閉園が決まった宝塚ファミリーランドから寄贈標本の引き取り。初期のホネホネ団メンバー（団長、事務局長、副団長、クミコ、中条運転手、樽野顧問）が集っていた。その後の標本整理で団長、ホネの実力をつける。

2004年

1月 8日
 3月 20
 ~21日
 5月 2日
 5月 7日
 5月末
 8月 26日

—なにわホネホネ団、本格始動—

・大阪自然史フェスティバル 2004 に出展決定。第一回会議、『なにわホネホネ団』の名称と「ホネホネ団通信」の発行決定。
 ・大阪自然史フェスティバル 2004 開催。なにわホネホネ団、お気に入りブース第二位の栄光に。初の小学生入団希望者チサト様現る。
 ・ホッキョクグマくる。外で剥く。
 ・大阪南港でハセイルカ回収。のちの組み立て団の主役となる個体。
 ・団長沖縄へ。初の地方支部「ホネホネ団 R (琉球)」と交流。
 ・天王寺動物園に遠足「生きてる動物に会いにゆこう！」

○なにわホネホネ団
 × 浪花 × 骨の団
 × ナニワ ○ ホネホネ
 このXが 1-1-1

2005年

7月 16
 ~17日
 11月 12
 ~13日
 12月

—外にでかけての活動はじまる—

・初の外部出展、三重県の子どもの城「みえしぜん文化祭」へ。初のお泊まり遠征。タヌキの解剖と鳥の仮剥製、ホネホネ団通信の配布など活動の紹介に行ったが、当日、運営スタッフから解剖は残酷だからやめると言われたりしてもめる、だがのらくらと乗り切って決行。参加は団長、松下団員、浦野団員、上田巳太郎団員、岡出団員、小倉団員、前田団員。
 ＊このイベントにあわせて『獣の標本作成ガイドー道ばたから収蔵庫までー』発行。250円の低価格に濃すぎる内容で今日まで団の活動を支える稼ぎ頭。伝説のロングセラー。
 ・奈良教育大学『青少年のための科学の祭典』に出展。こりずにタヌキを剥く。ここでは受けた。団長、高田団員、浦野団員、力本団員、三輪団員、新田団員、橘団員。
 ・INAX ギャラリー（現 LIXIL ギャラリー）で、12月2日から2006年8月19日まで、企業ギャラリーとのコラボ展示会「小さな骨の動物園」開催。展示される骨格標本の約8割が大阪自然史所蔵。これだけのホネを貸し出すのは初の試み。展示会は大坂、名古屋、東京会場をめぐり、大入満員。INAX としては初の会期中のブックレット増刷。



しはじめにホネホネ団のロゴが2枚あった。

2006年

1月22日

—ホネ展成功の追い風を受け調子よく活動—

・INAX ギャラリーの展示にあわせた標本作製講座。ホネホネ団として一般人を相手に標本講座をやる最初だったかも？

3月 3日

・団員が50名に。

4月 1日

・キリンくる。

4月 5日

・友が島にウミガメ拾い遠足。

11月25

・『青少年のための科学の祭典』大阪市立自然史博物館に出展、参加者にホネ洗いをしてもらう。

～26日

—初の活動助成金確保！—

2007年

2月24日

・岸和田自然資料館に遠征皮むき。外でも活躍できる標本ボランティア集団として活躍。岸和田港でゴミ拾いして遊ぶ。ヤマコメ こげたどぐねズミむらた。

4月

・新潟県十日町：まつだい農舞台でのホネの展示会「小さな骨の美術館」に協力。ミュージアムショップにグッズもあつた。

4月13

・大阪バードフェスティバル2007に出展。鳥の仮剥製実演とホネクイズ。じつは売上が 422222円...

～14日

・ホネホネ団に初の助成金。「花王・コミュニティミュージアムプログラム2007」。25万円。皮剥いたり肉とったりしてばっかりのホネホネ団活動に、期待の骨格標本組み立て活動を！と応募したらみごと初の助成団体に。154団体中の16団体。東京で行われた授与式に河原団員、前田団員と参加。

7月11日

・新潟県十日町へ、会期の終わった標本を梱包して送り出す作業へ。帰りに新潟県柏崎市の高浜海岸でカマイルカを回収。発見時の計測値によると体長は184cm。この一週間後に中越沖地震が発生。貴重な標本となった。

7月20日

・兵庫県洲本市由良町：成ヶ島でオサガメ漂着の報を聞き出かける。漁船を出してもらい島に渡り、現地で掘り起こし解体。ヒレ以外はほぼホネのチップ。旧団長号と中条号で回収。博物館のコンテナで水浸け。

8月

・豊橋自然史博物館で団長がホネホネ団の紹介。出店でグッズを売りまくる。

2008年

2月

—団員100名突破、組織巨大化—

・INAX ギャラリーの展示ブックレットから派生して出来た写真絵本『ホネホネたんけんたい』出版。団長初の科学絵本。ホネホネ団もホネけんきゅうしつとして登場。

3月 2日

・神戸市須磨区の須磨海浜水族園のイベント「須磨ボラフェス」に出展。

4月 9

・ザトウクジラ♀ 第一回。(発見は3月22日)徳島県阿南市野々島に漂着。現地で解体、軽トラック+軽自動車を持ち帰る。引き潮を狙って作業し、満ち潮で撤退。膝まで腐った脂海水でデロデロになる。野々島は無人島のため、ライフジャケットを着てボートで送迎してもらった。最初はミンククジラかと思っていたが、肩甲骨の形でザトウと同等。

～10日

4月23日

・ザトウクジラ第二回。徳島県阿南市、野々島。放置された死体は2週間ではほぼ白骨化。海の死体分解の早さに驚く。現地で尾を解体、ホネを回収。不要になった手こぎボートを回収用にいただく。命名「臭魚丸(くさなまる)」。世界最小捕鯨船。軽トラック+軽自動車を持ち帰る。砂場に埋設。

6月

・花王・コミュニティミュージアムプログラム2008の継続助成が決定、50万円。さらなる普及活動として、ホネホネ出前プロジェクト、そして夢の「ホネホネサミット2009」の開催にむけた資金獲得。

6月13日

・団員が100名を突破。

11月15

・大阪市立自然史博物館「かんさい自然フェスタ」で、組み立て団のハセイルカ全身骨格が完成、お披露目。ホネホネ団で組み立てた最大の骨格標本。

～16日

2009年

2月15日

—ホネホネサミット開催—

・きしわだ自然資料館でホネホネ出前プロジェクト。

2月24

・三重県四日市市市立中央小学校、市立図書館でホネ授業。

～25日

3月20日

・山口県岩国市の岩国科学センターでホネ授業

*団員が130名くらいになる。団員同士の名前が覚えられなくなるなど、こぢんまりとしたアットホーム感だけで運営するのが難しくなる。世話役の団長、副団長、事務局長は夏の特展準備のため超多忙になり、その上通常活動も続け、見学者の受け入れも大量にしていたため負担が激増。活動日の雰囲気あまり良くなかった。無謀な作業への行き詰まり感もあり、一つの発展段階的な壁にむきあっていた年。

ホネホネ 2009

なんでもうま... 11か月の... しゃべり... もうやめたいよ...



肋骨の角度こためりました

まじい... けんこ? 27

7月

- ・絵本の続編『ホネホネどうぶつえん』出版。撮影は天王寺動物園でも行なった。
- *「花王・コミュニティミュージアム・プログラム 2009」の継続助成決定、50万円。これでホネホネサミット 2009 で出会ったホネ関連団体の情報をまとめたガイドブックと、拡大してきた組織の運営のみなおしを行った。「ホネホネ雑技団」の誕生はこの助成金から。山積みの雑用を別の日にのんびりこなす作業日。

7月 4日
~8月30日

- ・大阪市立 自然史博物館の夏の特別展『ホネホネたんけん隊』が開催。約 600 点のホネが並んだ。組み立て団作成のアオダイショウやハセイルカも並んだ。

8月22日
~23日

- ・ホネホネサミット 2009 開催！日本全国から 34 団体が出展。約 8300 人の来場者。ドイツからゲスト 2 名。一日目の懇親会はナウマンゾウの周りで 100 名をこすホネ仲間が熱く語り合う最高の夜に。記念講演会と標本実演は立ち見が出るほど大入り満員。

10月10日

- ・団員が 150 名を突破。

12月13日

- ・きしわだ自然資料館でホネホネワークショップ。手羽先のホネ作り。



2010年

—もっと楽しい定例活動へ、作業量の見直し—

2月 1日

- ・カバくる。

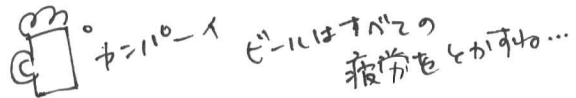
5月22日

- ・堺市近くにマッコウクジラ漂着。すったもんだの末に 31 日、引き取りに赴く。全長 9.1 メートル、♀だった。隅内から巨大なカラストーンビが出る。後に科博の窪寺先生の同定でダイオウイカと判明。のちに組立てられ 2013 年の大阪湾展で堺のマッコちゃんになる個体。

7月

- ・『ホネホネすいぞくかん』出版。2009 年のホネホネたんけん隊展で登場していたホネがたっぷりおさめられている。

- *できるだけ定例活動日の作業量を減らし、18 時片付け開始、19 時掃除完了、20 時にはお疲れさま飲み会が出来るように心がけた。数よりもきちんとして終わらせられた満足度を高めることを重視し、殺伐とした雰囲気になくそうと努力。



2011年

—東北遠征団始動—

2月26日

- ・ホネットのスタディツアーを開催。岐阜の県立博物館、アクアトトぎふが受け入れ先に。大型バスで水族館に行って魚の頭を剥いて、翌日博物館でバックヤードを見まくり、ホネホネ発表会で各地の取り組みも聞くという豪華なツアー。

3月11日
3月12日
3月13日

- ・静岡の科学館『る・く・る』のイベントに出展、活動報告とワークショップ。とはいえ気もそぞろ。
- ・東北遠征団の始まりとなる、支援活動への話題がメーリングリストで飛び交う。

4月

- ・自然史博物館の学芸員、子どもワークショップスタッフの有志で、東北の博物館への支援活動を話し合うミーティング。標本レスキュー活動をメインにする学芸員サイドと、子どもや親たちへの教育支援をメインに考える私たちが、2本立ての活動を進めて行こうと話す。

6月17日

- ・「花王コミュニティミュージアム・プログラム—ここに寄り添う文化プロジェクト 24—」の助成決定、50万円。

9月10日

- ・団員が 200 名を突破。

9月16日

- ・第一回東北遠征。岩手県の遠野市、山田町、大船渡市をまわる。

~18日

10月 8日

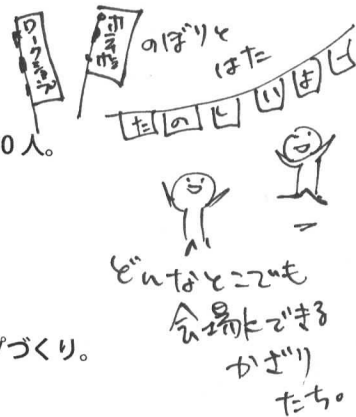
- ・「ホネホネサミット 2011」開催。台湾からゲスト。入場者 11,100 人。

~9日

12月15日

- ・第二回東北遠征。岩手県大槌町、陸前高田市をまわる。

~16日



2012年

—遠征活動の発展—

6月

- ・第 3 回東北遠征。福島県いわき市。水族館での金魚のストラップづくり。

10月

- ・第 4 回東北遠征。宮城県南三陸町。

12月

- ・第 5 回東北遠征。岩手県大船渡市、陸前高田市。

12月

- ・キリンのくる。

2013年

—鳥だけの作業日「鳥の日」開始—

- *ホネホネ団の活動日に仮剥製作りをやめ、鳥は鳥で独立した作業日に設定、より集中して細かな作業が出来るので人気。固定参加者が付いている。

4月

- ・第 6 回東北遠征。岩手県一関市。

5月

- ・団員が 250 名を突破。

7月

- ・第 7 回東北遠征。宮城県南三陸町。

9月

- ・第 8 回遠征。岩手県大船渡市。

11月23~24日は岩手県山田町と陸前高田市です。

←ヤシとミノル

グラフで見るホネホネ団

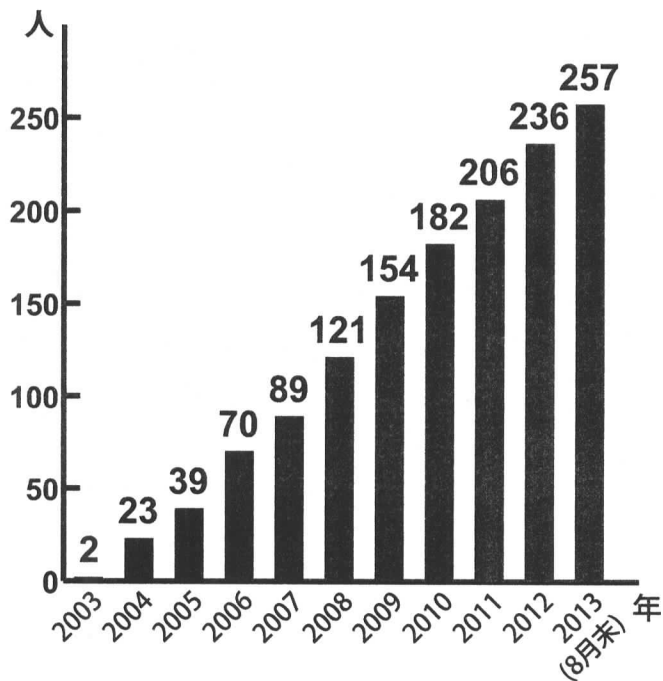


図3. 団員数の増加

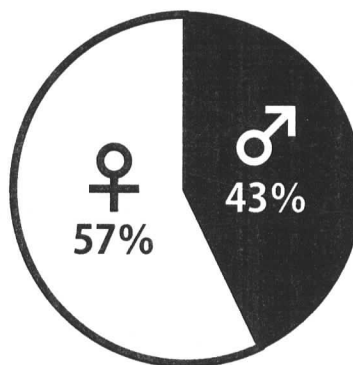


図1. 団員の男女比

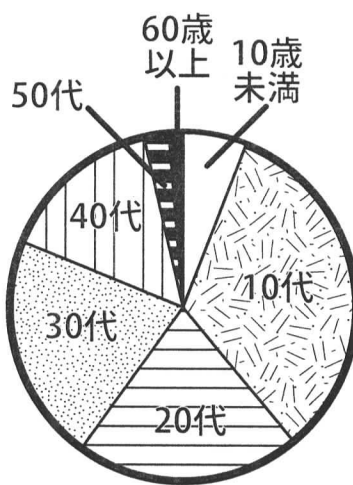


図2. 団員の年齢構成

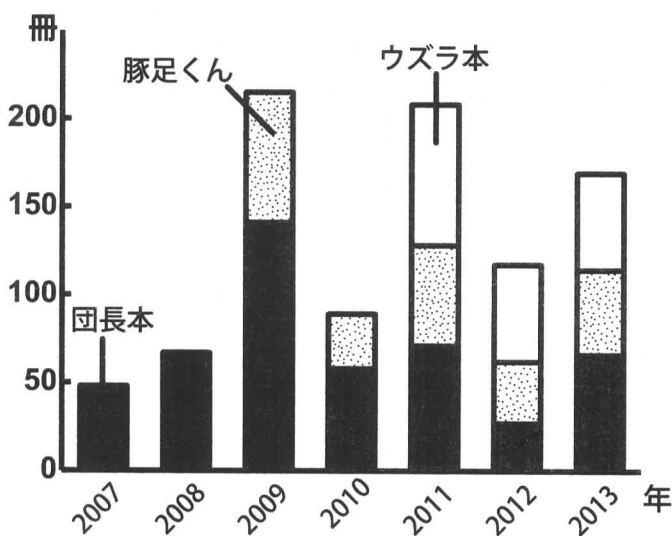


図4. オリジナル本の販売冊数

図1. 図2. ホネホネ団の団員構成。一時期は6割以上が女性といわれていたが、徐々に男性が追いついてきている。年齢をみると10代、20代で過半数を占める。10年という歳月を経て古参の団員の高齢化以上に、次々と若い団員が入団しているのだろう。

図3. 団員数の増加。今のところ2年間に50人程度の入団者がいるが、増加速度は徐々に大きくなっている。ホネホネ団には退団の概念がないので増加する一方である。

図4. 重要な資金源であるオリジナル本の販売数。3冊とも概ね均等に売れている。新刊が出る毎に売り上げが伸びている上に、既刊本が安定して売れ続けている。つまり販売数を伸ばすには、次の新刊が必要か？

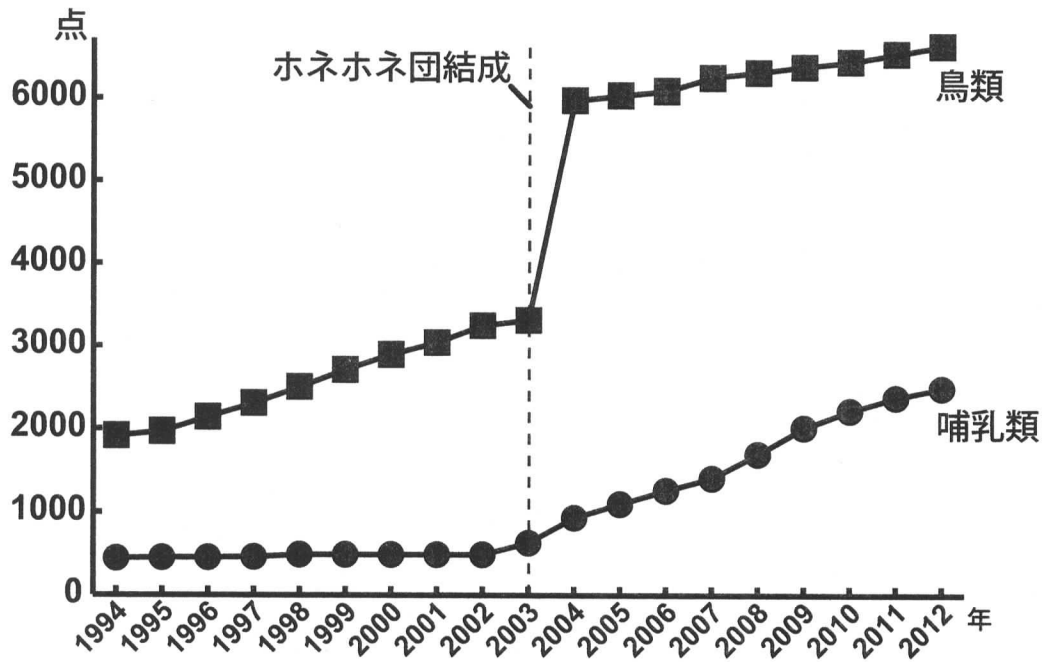


図5. 哺乳類と鳥類の標本数

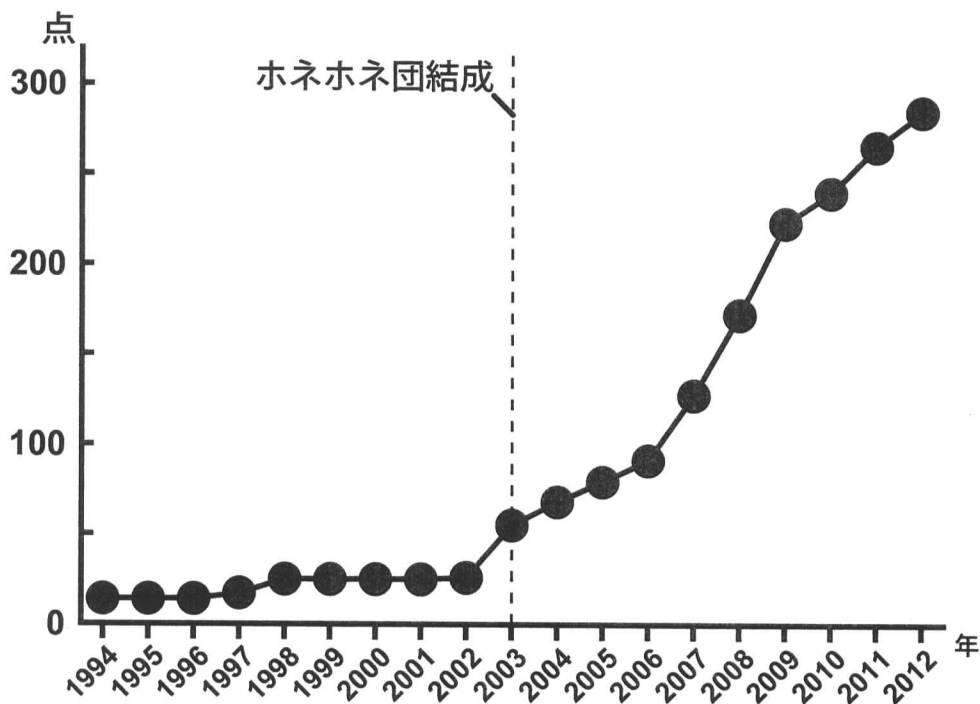


図6. タヌキの標本数

図5. 大阪市立自然史博物館に登録された哺乳類と鳥類の標本数。ホネホネ団結成前は哺乳類の標本はほとんど変化ないが、ホネホネ団結成以後は年間100点以上のハイペースで増加している。鳥類についてはホネホネ団結成時に宝塚ファミリーランドより譲り受けた標本により激増しているが、ホネホネ団前後で増加率に顕著な増加は見られない。鳥類担当学芸員の働きがいかにかを示している。鳥の日の設定および西表島鳥類調査隊の活動開始がどの程度影響するか注目していきたい。

図6. タヌキの標本登録点数。入団試験に用いられるタヌキはホネホネ団員の増加にあわせて急増している。2009年を境にその増加が鈍っているが、これはタヌキ不足によって入団試験にアライグマ、ネコなどその他の中型哺乳類が用いられるようになったためであると思われる。



十周年記念・インタビュー

いつもお世話になっている団長・副団長・事務局長にホネホネ団の10年間の思い出を振り返り、そして未来を語っていただきました。

■心に残った、三大エピソードは？

【団長】

①INAXギャラリーとのコラボ展示「小さな骨の動物園」

（甘やかさず）

担当者が博物館に来たとき、銀座のINAXギャラリーに通っていた団長は大興奮。ぜひ協力しよう絶対おもしろくなるって！と騒いだことを今でもほんとによかったと思ってる。この年、ブックレット出版もあわせて、なにわホネホネ団の名前が印刷物に掲載。これから新聞雑誌にテレビと取材が相次ぎ、ホネホネ団がすばらしくメディア受けする存在であることを思い知らされる。いちばん乗りが日経新聞の文化欄。これでなかったら、あとに続く記事も大分毛色が違っていただろう。

②ホネホネサミットの開催

2009年8月、念願の全国ホネなかが一堂に会する前代未聞のイベント。ホネをキーワードに人とつながれる確信を持った。ドイツからの標本士（ミノルとヤン）の発表は、どんな標本を目指したらいいのか知ることができ、目からウロコ。技術で行き詰まっていた気持ちを打開してくれた。

③ホネホネ東北遠征団の始動

博物館で標本を作る活動から、一気に他の博物館支援に活動範囲が広がった。「博物館」をキーワードに目的や使命を共有でき、規模もフィールドも違う新しい活動の実現に向けて動くことができる、意識の高い実力ある集団だと確信した。いつもありがとうございませう。

【事務局長】

○宝塚ファミリランド閉園

ホネホネ団活動前なので番外だろうが、忘れられない。ホネホネ団のルーツ。宝塚ファミリランドが閉園するんだけど、今まで貯め込んだホネや剥製を引き取ってくれないかという要請が、博物館に舞い込んだ。下見に行ってみると、いっぱいある。剥製は汚れているけど、けっこう珍品も混じってる。ホネは頭骨だけだけど、色々ある。これは引き取らなくっちゃ！それには人手がいる。で、

当時、博物館に標本整理のアルバイトに来ていた二人に手伝つてと声をかけた。後の団長と副団長である。それまでは、鳥の剥製には興味があったが、ホネにはあまり興味がなかった。でも、いろんな種類の頭骨を見るにつけ、ホネって面白いな。と思った。団長と副団長もそう思ったらしい。それから、なんとなく3人でホネホネ団の活動が始まる。

①名前を決める会議

10年前に活動を開始したことになる

が、10年前の夏に活動を始めた時は、なにわホネホネ団とは名乗っていなかった。名前とは他者に説明をするときに、初めて必要になるのだ。内輪の数人で活動するのに名前はいらない。なんとなく団長が、ホネホネ団と言いつつ、ホネホネという言葉はあつたがそれだけ。年が明けて、2004年の初め。第2回の大阪自然史フェスティバルに出展することにした。で、名前を決めなくっちゃとなつたのだ。すでに言い慣れている「ホネホネ団」は、入れたいけどそれだけじゃあ。ということ

で、前に何か付けようと言つたことになつた。大阪？ 浪速？ 関西？ いくつかの案が出た中から、なにわを選んだ。で、次は標記でもめる。「団」は漢字だろう。全部漢字で「浪速骨骨団」から「なにわほねほね団」などなど、いろんなパターンを書いてみた挙げ句。平仮名、片仮名、漢字の3種類を混ぜることになつた。と記憶している。なんせ10年も前のこと、きつと記憶の脚色もあるだろう。

②ホネホネたんけん隊展

（この時の会議）

2009年の博物館夏の特別展は、なにわホネホネ団も主催の一面をしめ開催した。ホネホネ団で作成した骨格標本をいっぱい展示したけど、それだけではない。標本を借りる時も、解説書の執筆でも、ホネホネ団の人脈を大いに活用した。さらに展示の準備では、何人ものホネホネ団員に手伝ってもらつた。特別展を、サークルと一緒に開催するというのは、うちの博物館で初めての事じゃないかと思う。それも名前だけでなく、実質的な開催、なにわホネホネ団なくしては成立しな

かつた特別展であつたと思う。

③ホネホネサミット

ホネホネたんけん隊展のあつた2009年夏。特別展がオープンしたと思つたら、次はホネホネサミットの準備に追われた。今考えると、よくそんな無茶な設定にしたもんだと思う。それでも、なんとか8月終わりに開催にこぎ着けた。

ふたを開けてみると、北海道から沖縄まで、日本中からホネホネ関係者や関係団体が集まり、サミットという名前に違わぬイベントになつた。これはひとえに団長の人脈の広さによる。勢いで、全国のホネ関係者のネットワークhoneetも設立。緩く細々とはあるけど、いまでもその関係は続いている。

第2回ホネホネサミットは、2年後の2011年に開催。本当は、なにわホネホネ団10周年でもある2013年に第3回を開きたかったが、資金が確保出来ず断念。来年度以降に資金確保を頑張ろう。

【副団長】

①宝塚ファミリランドの閉園

幼い頃よく連れて行つてもらつた宝塚ファミリランドが2003年に閉園。思い出の場所がなくなる！動物たちはどうなる！うえーん！と悲しんでいたところに和田学芸員から「標本を運ぶから来る？」と言われたのが、私にとつてのホネの始まり。生きている動物を扱うところで、あんなにたくさんさんの標本が作られ、保管されていたんですよ！動物園の方の博物館精神をみたようで、

これが
2004年1月8日
団の名前
決定の会議
1-10だ!
役職まで
まめる...

2004年1月8日(木) 西澤 和田 米澤(中条) 近藤

一本の議題 -
・フェス 出展について

団体名	開票結果
浪花 ホネホネ団	0
浪速	0
ナニワ ☆	0
なにわ	3
NANEWA	0

正式名称 「なにわ ホネホネ団」に決定!!

○ 役職 について

団長 西澤 → マルマシロの頭骨
副団長 米澤 → ミネオ (あかりおれい)
事務局 和田 → らぶおせでんしゅう
その他 近藤 → とう骨+尺骨と上腕骨、かんせつ
橋 → ネコ ハウゾウもなみな

内容 目的

○ 哺乳類の皮

死体から 毛皮と骨格標本をつくっています。

主に 平和の夜

自然史博物館の実習室で 活動 (終電まで)

他団体との 交流

頭骨のくみかた

生きた動物を標本として未来につなぐって仕事を鮮烈に意識した。それに加え、初めて触るホネにドキドキワクワク! 不謹慎ながらも、団長とキヤッキヤしたなあ。今でも初めて持ったゾウの下顎の重みは感覚として、この手に残っている。不謹慎ついでに、園内にあつた取り壊し待ちのメリーゴーランドに、3人でまたがって記念撮影なんかもしたなあ。十年前…みんなかわいかった。なんせ3人とも20代! (あれ? 事務局長の計算があわない!?)

② 毎年メリーホネスマス
もう何年もクリスマスマスをホネホネ団で過ごしている。部屋を飾りつけ、クリスマスソングを流し、キーキヤッキンをちやつかり食べ、プレゼント交換までしちゃう。その裏側ではイブイブからの連続3日間皮剥きレースも行われ大量の死体が剥かれているからすごい。年末には博物館の冷凍室をできるだけ空けなければ、他の研究室の標本の虫落しができるという、大人の理由があることを知ってか知らずか、みんなクリスマスに集まって頑張っているのである。

③ すごい団員さんたちの出現
始めのころは、死体を準備して、みんなに作業をふって、入団試験をみて、できあがってくる標本に番号を付けて、終わったら片付けをしてと、3人でお世話していても、とにかく忙しかった。最近、常連団員さんたちが、見学の方や新しい団員さんに活動の趣旨や技術的なことを教えてくれたり、最後まで片付けをしてくれたり、本当に助かっている。

なんというか、いち参加者から仲間になってくれた感じ。それどころか、全身骨格を組んだり、研究したり、骨の普及に努めたりと、自分たちでいろんなことにチャレンジしていて、頭が下がる。めっちゃ心強い。

■ 三大死体・標本は?

【団長】

① 2004年5月7日 南港のハセイルカ

ホネホネ団ではじめて回収したイルカ。体長約2.3m。顧問と一緒にもらいに行き、

橘さんと3人で剥いた。これが2006年に助成金を得て組立てられ、ハセばあさんという名前まで付き、2009年のホネホネたん

けん隊展で展示されることになろうとは。

② 2007年7月20日 兵庫県洲本市由良町、成ヶ島のオサガメ

早朝の港での待ち合わせに間にあわないかも! という事務局長の主張で、前夜に旧団長号で由良港まで移動。しかし宿はなかった。

車で3人で寝られる! と言い張る事務局長を車内に残し、副団長と車の影で夏の夜風に吹かれながら車の影で段ボールかなんか敷いて寝た。すごい状況だと思った。結局このオサガメはほとんどまともな姿をとどめておらず、ちらばったチップ状の骨を新聞紙にくるみ、砂利の中から拾い集めてきた。

③ 2008年4月9・10日、23日の徳島県阿南市椿町、野々島のザトウクジラ

体長約7m。現地解体、二回に分けて骨を回収。無人島の磯に漂着したクジラをGW前に回収してほしいというYMC A阿南国際海

洋センターからの依頼。重機も入らず、船で渡してもらったあとは歩いてクジラの近くまで行き、潮の引いている間に作業。しかしさっぱり進まず人力の限界を思い知る。一部を残してこの日は帰り、約2週間後に再訪。古いボートを使って散らばる骨を回収。しかし何よりきつかったのは往復8時間の運転であった。夜明けとともに大阪を出て、作業して日帰り。運転手は約10時間運転しつ放し。ハードすぎ。助手席と人間関係が崩壊しそうになった。肉体労働を伴うクジラ遠征は一泊がおすすめ。



【事務局長】

① ホッキョクグマ

ホネホネ団で処理した大物第1号として、とても印象深い。2004年5月に、ホッキョクグマが死んだとの知らせを受けて、引き取ってきた。大物だしみんなで処理しようと、声をかけたら、子どもを中心に10人が集まった。気候がいいし、大物なので、外で皮剥き。10人でシロクマを囲んで撮った写真が今も残っている。いま見るととても懐かしい。これが最初期の中心メンバー。

② カマイルカ

ホネホネ団の内部組織の一つに「大阪湾ウミガメ・クジラ回収班」というのがある。活動内容は名前から分かる通り。のはずなんだけど、何度か大阪湾以外にも遠征に行っている。最初の、そして一番遠くへの遠征は、2007年7月に新潟県柏崎市に行ったもの。団長、副団長、事務局長、専属運転手2

号の4人で車で出かけた。団長が、現地近くの某博物館施設に用事があったので、そのついでに海岸に埋めたというカマイルカのホネを掘り出してこようという算段。

初日は、山の中でヤマセミを見たり、コムリがいそうな穴に入ったり（事務局長は入らなかつた）、酔いつぶれた団長が深夜に起きて騒いだり、といういろいろあったが、それはさておき。2日目、カマイルカを埋めたという海岸に行った。柏崎原発にほど近い砂浜だった（ちなみに数日後、その辺りで強い地震があつて、原発は緊急停止していたが、それは別の話）。この辺りに埋めたというので、掘ってみるのだけど全然見つからない。目印をつけたというのだけど、その目印が見つからない。あつちかな？こつちかな？これは手づらで帰ることになるのかなあ。と思つたら、埋めた時、埋めた場所を撮った写真があるという。それも角度を変えて2枚。民家と電柱の重なり具合などを目安に、撮影場所を探し、ここだ！と思つた場所を掘ってみると、見事に見つかった。海岸に埋めた物を再発見するのは難しい。でも、写真を2枚撮つておくだけでなんとかなつたりする。とても勉強になった。帰りの車では、さだまさしの曲が流れていたと記憶する。

③ ザトウクジラ

やはり遠征は記憶に残る。そして大物は記憶に残る。これまた「大阪湾ウミガメ・クジラ回収班」の大阪湾外遠征。徳島県阿南市のとある無人島にクジラが打ち上がっていると、2008年3月22日、

画像ではヒゲクジラの種類としか分からなかつたが、回収に行く事にした。

4月10日、団長、顧問、事務局長の3人で現地向かった。地元の方の協力を得て、船で島に渡してもらう。島に渡った時点で、すでに午後1時をまわっていた。事前の情報ではクジラのサイズはよく分からなかつた。全長5歳と全長7歳では、長さの差はちよつとに思えるかもしれないが、作業の大変さは桁違い。どつちだろう？と、ドキドキしながら近づいてみて愕然とした。全長7歳を超えている。これでは、今日中に終わらないのでは？と思いつつも、できることをするしかない。頭部のホネはすでに腐つて、バラバラになつているので、回収。胴体の腐つた肉を縦に切つて、何とか胴体も回収。と頑張つてる最中に、暗くなつてきて作業を断念。肉がある程度、腐つて処理しやすくなつてから、もう一度来ることにした。

2回目は、4月23日。団長と事務局長だけで現地へ。今回は朝早く出て昼前に到着。さあ解体がんばるぞ！と思つたらとんだ肩すかし。というのは嘘で、現地協力者からすでに情報が入つていた。海岸に打ち上げられ、ずーっと波に洗われていたクジラは、想定以上の早さで分解され、どんどんホネになつてバラけているという。到着してみると、見えるのはハシブトガラスとトビの集団。前回あつた腐つた巨体は見あたらない。代わりに海岸に転がる白いホネ。頑張つて集めたけど、一部のホネはすでにどこかに運ばれてしまい、すべては回収できなかつた。もう1週

間早く来ていれば…と悔やまれる。

海岸に打ち上がったクジラは、とくに波にチャプチャプ洗われていると、あつという間にホネになる。袋に入れて、周囲をガードして、チャプチャプな場所に設置しておけば、どんどん骨格標本ができあがつていきそう。海岸近くで暮らしている方はお試しあれ。（番外）ニタリクジラ？

家島群島に、数年前ニタリクジラが打ち上がり、海岸に埋めた。という話を聞いたのは、2009年春だつたと思う。ニタリクジラの標本は、博物館にないので是非欲しい。団長も乗り気で、現地の人と交渉を進め、ユニボで掘り出してくれる話まで決まつた。一度下見に行つて、掘り出す日を決めて。と考えている途中で、夏のホネホネたんけん隊展の準備が忙しくなつた。事務局長も団長も、とてもニタリクジラを考える余裕もなく、特別展の準備に追われる。準備が終わつたと思つたら、今度はホネホネサミット。サミットが終わつたと思つたら、フェスティバル。ふと気付くと、ニタリクジラのことはずつかり忘れていた。

あれから4年。もうニタリクジラのホネは砂になつてしまつたことだろう。これは、ニタリクジラのホネは、標本にできなかつたという話。だから番外。とても残念。いまだにニタリクジラのホネは入手できていない。



【副団長】

①初めての死体
まだ、3人だけで夜な夜な剥いていたころ

1冊目のホネ団1冊



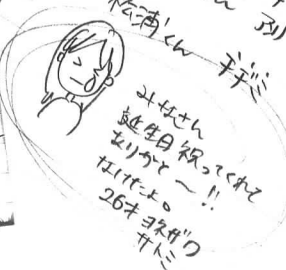
2004 07-25
01-03-11つぷり
とび
この筆名(園内)
→和田
→米澤

5/29(土) 北(3匹)のホネホネ団
和田 米澤 北理 ちさ
千葉 二木 ジカ 頭
浦野動物病院 5頭
No.1 米澤
No.2 北理
No.3 ちさ
No.4 二木
No.5 千葉
ちさとちさおひつめ
ケガ又胎児もみせ
休ホネ団 倉庫
なまのちかんと
和田さん
ちさとちさ 米澤
浦野動物病院 5頭
No.1 米澤
No.2 北理
No.3 ちさ
No.4 二木
No.5 千葉
ちさとちさおひつめ
ケガ又胎児もみせ
休ホネ団 倉庫
なまのちかんと
和田さん
ちさとちさ 米澤



20040724 木ホネ前夜祭

70% → 西澤
かたせ → 和田
とろり → 米澤
ツツトリ → 和田
精糖 大きくて 大き程にわける均等に
80%と〜頭割れたと〜 29%
まっとな時間におくれた!
はんか奥でいかわ



に団長と事務局長に教えてもらいながら、恐る恐るタヌキを剥いた。皮を開くと白い脂肪に赤い筋肉!どこにメスを入れるのか!足を一本剥くのに1時間ぐらいかかり、あげくの果てにはしっぽをライオンにしてしまい、ホネホネ団通信初のザンゲを書くことに。今、思い出しても恥ずかしいけど、入団試験の人を見てみると、初心を思い出しても、成長している自分が嬉しかったりもする。ここまでへたつびじゃなくても、みんなにもあるよね? 原点となる初めての死体と初心。

② マッコウクジラ
団長やスナメリ隊長が記事にしているマッコウクジラ9頭。とにかく博物館で引き取ることが決まるまでの一週間、捨てられやしないかハラハラドキドキ。祈るような気持ちで待っていた。ホネホネ団の強力な協力があり、無事に解体・除肉することができ、3年の月日を経て、今年の特別展「大阪湾」にて全身骨格が展示された!感動したよ。個人的には、昨年退職された樽野学芸員(ホネ団顧問は永遠に退職なし)と一緒にクジラに登れたなんて夢のようだった。

③ 身近な哺乳類(三大じゃないやん)

身近な哺乳類と言っても、生きている限り気やすく触らせてくれない。それどころかぴゅーと逃げてゆく。もともと哺乳類の野外調査をしていたのだけど、ホネホネ団で死体を好きなだけ観察できるようになってから、格段にレベルアップした。地面に残った足跡や残された毛、自動撮影装置にちらっとだけ映った耳など、断片的な手がかりだけでも、

何の動物かわかるようになった。本物に触ることの大切さを実感。とっても感謝している。ちなみに日本の陸上大型中型哺乳類で、剥いていないのは、ヒグマ・イリオモテヤマネコ・ツシマヤマネコ・オコジョ・イイズナ・エゾユキウサギ・アマミノクロウサギ!剥いてみたい!天然記念物はさておき、拾ったらぜひ博物館へ!

【事務局長】
十年後のホネホネ団は?
来年のことも分らないのに、10年後のこととは想像もできない。確実に言えるのは、今のメンバーは10才分、歳をとっている。いま26歳だから、36歳になっちゃうなあ。(↑こちら!) By 団長&副団長)そして、なにわホネホネ団は、まだあるのかな? それは団長次第だと思う。ホネホネ団は、団長と共にあるのだから。まだあるんだつたら、もうしばらく事務局長を続けるとしよう。

【副団長】
10年後も楽しく活動していきたいなあ。博物館には、これからもずっと標本を未来につなぐ使命があるけど、学芸員だけでこなすのはどう考えても難しい。みんなの力が必要であり続けるはず。こんな風にめちゃくちゃ楽しく活動できるのは、市民の活動を応援してくれる博物館があって、団長が自由に飛び回っていて、事務局長が任せてくれているからこそ。こんな構図は奇跡的やなあと思っけど、時代が変わってゆくにづれ、関わる人が作っ

ていくものだから、未来のことは、未来の人にお任せ。



【団長】

1：収蔵作業の検討と効率化

ホネホネ団はすばらしい人材がそろっていて、人数も多いので、組織としてはまわって行くだろうけど、その成果物を受けとめる標本の収蔵作業が滞っているので、バランスをとれるようにしたい。完成したものをどんどん収蔵庫へ。収蔵庫を整理して場所が無駄にならないように収納方法や箱などを見直す。

2：標準化作業の適当な機械化と工程の整理

私たちが一線を退いた後に未処理の冷凍標本が工程も混乱したまま山と残されるのを避け、後の人を孤独に困らせないように、たくさんの方の力を借りて作業できる仕組みを整える。例えばいま中型哺乳類のホネ標準化の工程（剥いて、小分けして、ラベル入れて、ネットに入れて、軽く煮て、水またはエアーシヨンの併用で腐らせて、回収して水洗して、乾燥させてカリカリして、チャックパックに小分けして収蔵庫へ）は2007年頃に確立されていて、一気に大勢で処理したら後は自然に任せる流れができてるし、大型哺乳類に関しても、元々あった砂場への埋設に加えて2009年頃に家庭用の合併浄化槽のエアーシヨンを利用したブックブック槽が登場し、さらに効率よくなっています。鳥の標本は2013年から月に一回の「鳥の日」を設けた事で効率よく進むように…。こんなふう

に作業をわけたり、少しずつ部分的に機械化して、死体から収蔵庫までのきれいな流れがそれぞれ作れるよう工夫したい。機械化のためのお金もどこからとってきた。学際研究を進めようとする近くの大学とコラボとかがいいんじゃないかと模索中。

3：標本を使った研究のしやすさ

わたしたちの作った標本が活かされるよう、平成13年で止まっている博物館のホームページの標本データベース作業にお金が付き、更新されて、どんな資料が収蔵されているかわかるように。あちこちから標本を使いたい人がやってこられるようになってる。

4：ホネの人材育成

わたしたちの仲間になって働いてくれる、できたらホネ団育ちの人をスカウト。和田さんをはじめとした学芸さんとの間に立って、参加者や標本のお世話をする次世代の世話役が有償で雇われ、わたしは4〜5年くらいで団長を引退して、次の人のサポートにまわってる。そんな方がいいな。いまの団長職は私が出しすぎている。いろいろやる人が多いから、必要なお世話仕事を分類して出来る人に小分け。

：がぜんぶ実現してる、といいな。想像もつかないようなジャンルとのコラボもいいな。

【これを2、5、8、10年で実現できたとしたら…】というだけはタダだ。

2年くらいで↓収蔵庫の片付け、処理中の標本チェック。哺乳類・鳥類標本の作製や整理にアルバイトの予算が確保される。一緒に整理の作業もできたらいいな。バイトさんに仕事を引き継ぎされて、滞っている日常的な登録業務がまわりはじめる。標本作製に関する資料が整理される。

3年くらいで↓水が使える部屋（旧館の地下とか現標本制作室）を片付けて、日常的に標本作業ができるようになる。アルバイトで入った標本作業の人と一緒に活動できる次世代のホネ団お世話役を育てる。東北の支援活動、現地に行つての活動から手を引き始める。いまおつきあいの出来てきた現地の学生団体などにじわじわ引き継いで離陸準備。

5年くらいで↓人力ではどうにも大変な部分がつぎつぎ機械化。ブックブック槽のエリアに屋根がかかり、新ブックブック槽保温機能付きが増設され、効率良く処理がすすむようになってる。毛皮の裏をうすく削るスライサーが導入、柔らかくて処理のしやすい毛皮の下処理が出来る。団長引退大宴会。引退した後、わたしは効率よくなった機械を使って楽しく標本処理のお手伝い。いろんな装置の工夫とホネ団組織の工夫をマニュアルとして冊子にまとめて発行、販売。

8年くらいで↓新しく作った本がバカ売れして資金が潤沢になり、月に2日程度のホネ団事務バイトが雇えるようになる。

10年目で↓満足度の高いボランティアの組織化と効率が良くて安価で安全な標本処理の装置、仕掛けが全国に普及して参考にされ、日本の博物館全体のホネ作業が底上げされ、標本の収蔵点数があがっている。ホネホネ団が活発に活動して収蔵庫がいっぱいになったので新しい地下収蔵庫が増設されている。第二回ホネの特別展。前回の規模を遥かに上回る1000点以上のホネが展示。来場者が増える。ホネホネサミット2023開催。こちらもとんでもないことになる。

20年後↓新しい学芸員さんを、新ホネホネ団が強力な味方として歓迎し、応援している。私はホネの博物館でも作って余生を送る。

健康で長生きして、うまくいきますように！

団長・事務局長・副団長





老兵の独り言

いっただったか、博物館のフェスティバルの会場を歩いていると、中学生くらいのお兄ちゃんに声をかけられ、ホネホネ団のパンフレットを差し出され、活動についての説明をさせて頂きました。団員であることを言いつぶれておとなしく話を聞くとともに、私自身、すでに幽霊化しているんだなあ、と思ったりしました。



私の会員番号は16番です。2004年の、ホネホネ団結成直後の会員と言つことになり。余談ですが、当時は入団試験はなく、私自身は試験を受けた経験がありません。自主活動というか、それまで、動物病院に搬入されて死亡した個体、あるいは個人的にひらつた死体は病院で解剖した後に骨にまでして博物館に「納入」していたので、その実績を認めて頂いたのかとも思っています。当時は会員数も少なく、その反面、標本数が増えた時代で、活動にも積極的に参加していたのですが、ここ何年かの会員数の増加、参加者の増加に、戸惑いを感じるとともに、昔のような居場所を見つげられずに、最近はその活動にあまり参加できずにいます。



自己紹介が遅れましたが、当方、堺市内で動物病院を開設しており、野生動物救護活動にかかわっている関係で、鳥や、まれには哺乳類、と言っても主にタヌキを扱うことがあ

ります。JRの駅で、(おそらく)無賃乗車しようとしていたタヌキがパトカーに乗って来院したこともありました。メンバーならご存知のように、都会のタヌキは疥癬症にかかっていることも多く、それらが持ち込まれることもたびたびあり、公衆衛生上の問題や、治療が望めないときは安楽死が選択される場合もありました。ホネホネ団以前には、それらを自分で処理しておりました。



獣医師という職業柄、病気の事や解剖における危険性を聞かれることもよくあるのですが、(知らぬ間に、衛生部長と呼ばれている?)私は臨床獣医師で、しかも対象動物は犬猫を主体としたコンパニオンアニマルで、野生動物を扱う訓練は受けていません、と、逃げています。病気や寄生虫については、同じ獣医師である乾会員の方が専門ですので、解剖時の異常個体についてはすべてお任せしているのが実際のところ。また、最近では獣医科の学生さんが多数参加されておられるので、彼らの新鮮な頭脳にお任せする方が正確であろう、と思っています。



個人的にはコウモリの研究をしています。その話を知人にしますと、必ず、病気は大丈夫なのか、と聞かれます。おそらく、吸血鬼のイメージが湧いてくるんだろうと思うのですが、何百種というコウモリのうちで、哺乳

類の血を吸う種類は1種のみです。少なくとも、日本にはそのコウモリは(今のところ)生息していません。とはいえ、よく言われるように、いろいろな物資の交流が盛んな今、国の境界がなくなりつつあり、そのようなコウモリが物資に紛れ込んで日本に入ってくる可能性は皆無とは言えないでしょう。また、

狂犬病ウイルス、狂犬病類似ウイルスを持つコウモリがヨーロッパやアメリカ、オーストラリアで見つかっており、人への感染も確認されています。韓国ではキクガシラコウモリという、日本でもごく普通に見られるコウモリから、特殊なウイルスが分離されており、人への感染も危惧されています。10年ほど前に発生した重症急性呼吸器症候群(SARS)は、最初はハクビシンからの感染が疑われていましたが、もともとキクガシラコウモリが持っていたコロナウイルスがハクビシンの体内で変異して人に感染できるウイルスになったとされています。鳥インフルエンザも、本来、鳥にとつては無害なウイルスが哺乳類の体内で変化をして人へ感染する形態になるらしいです。このあたりの話も乾会員が専門ですので、いつか、お話を聞ければと思っています。



昆虫などの外部寄生虫は、冷凍により死滅して人へ感染する危険性はなくなりますが、ウイルスや細菌類は、凍結では死滅されません。また、上記のとおり、現在では人への感染はないであろうと思われるウイルスでも、変異により人畜共通伝染病を引き起こす



可能性は十分あります。特に、十分な研究がされていない野生動物が持つ病原体については、注意が必要です。



病気で死んだ動物ではなく、交通事故にあった動物だから健康体であったであろうという推測は、こちらの都合の良い解釈で、事故個体であっても、病気でフラフラしている事故にあったという解釈が十分考えられます。ホネホネ団で扱う野生動物個体については、すべて未知のウイルス、細菌類を持っていると仮定して対応することが必要だと思っています。



血の付いた白衣で博物館を歩き回るといのは論外で、実習室内と室外を厳密に区別する必要があります。実習室内では必ず手袋を着用し、穴があくなどのトラブルがあれば、すぐに手を洗い、交換するなどの注意が必要です。無責任な言い方になりますが、ホネホネ団としては「安全な」死体を提供して作業してもらっているという認識はありませんので、体調が悪い時や何らかの薬を服用して免疫状態が低下しているような時は参加されないなどの、「自己防衛」をして下さい。



最近では幽霊会員、不良会員になっていきますが、ずっと気になっていたことを思いつくまま書かせていただきました。安全に十分注意して、楽しく作業できることを願っております。

浦野動物病院 浦野信孝

このおきまはパンフレットにしゃおう!



なにわホネホネ団入団のころ

ところで、一般の、ふつうの人たちにとつて、動物の死体ってどんな感覚だろう？

たぶん「怖い、汚い、臭い、気色悪い」という反応だろう。「桜の木の下には死体が埋まっている」という詩が、インパクトがあるのも、そういう感覚があるからだ。実は、この私も12年前、河内長野の烏帽子型公園で初めてタヌキの死体を前にしたときは、「うわ〜…」と思った。そのときは、ちよつと持つて帰る「勇気」が起きなかった。それを博物館にもつていったのは、Iさんという方だった（今なら躊躇せずに持ち帰るが…）。

もう、今から14〜15年ほど前、「僕らが死体を拾うわけ（この題名もさうとう怪しい）」…埼玉県にある、自由の森学園の理科教師、盛口満さん（現在は沖縄県那覇市のサンゴ舎スコーレの教師）の本を読んだ。生徒たちと、タヌキやイタチなんかの死体を解剖したり、もちろん生きてるいのを観察したりしているのを描いた本である。すぐくうらやましかつた。こういう学校に入りたかった、と思った。

その実習の現場が大阪の自然史博物館に出現している。「ホネホネ団は自由なホネと死体好き人間の集団です。」…それが、「なにわホネホネ団」だった。入りたい。矢も楯もなく、そう思った。ひよんなことから、そのころ団長と知り合い、活動日を教えてもらった。

〴〵〴〵

その前日、団長からの案内メールでは、ハクビシンとテンとマンガースの皮剥ぎの予定だった。でも実習室には誰もいない。通用門受付で聞いて見ると、「その入り口でやっていますよ」という。そこを見ると、若い人たちが集まって何かやっている。中学生くらいの女の子も数人いる。何やってんのかな？とよく見ると…、なんと！通用門の中に置かれた台には、ドーンとホッキョクグマが！！。痛みやすい内臓は処分されてるが、それでも「尾頭付き」、手脚付き。天王寺動物園で、その日の朝に死んだので、博物館で引き取ったそう。それを、10人がかりで皮を剥いでいるのだが、驚いたことに半分以上が若い女性！「僕らが死体を拾うわけ」にも書かれていたが、女性は意外とこういうことには強いそう。で、私も早速混ぜていただき、ホッキョクグマの皮剥ぎに挑戦。たまたまメスが足りず、常時持参しているアーミーナイフが役に立った。夕方5時ごろから始めて、すっかりきれいに剥けたのは20時ごろ。皮を剥いだあとは、筋肉を取り除き、関節を外して解体する。骨にしやすくするためだ。

〴〵〴〵

皮は水洗いして、翌日からは皮下脂肪をこそげ、乾燥させ、なめす、という作業。ホッキョクグマって、毛は白いけど、皮は黒いんですね。知識では知ってたけど、実物見て納

左…ホッキョクグマの皮剥ぎ



得。参加してるメンバーは、半分以上が十代から二十代の若者。しかも3分の2が女性。最年少は、小学5年生という。これにはかなり賛否両論、あると思う。小中学生から、そんな血なまぐさいこと体験していいものかどうか…。という具合に。ホネホネ団の主旨は、交通事故やガラス窓に衝突して不慮の死

を遂げた動物や鳥などを、その死を無駄にしない、丁寧に葬って、標本として役立たせたい、という理念がある。だからここで解剖している動物は、ほとんどが交通事故の死体。たまくに動物園からとか、害獣駆除で間引かれた個体とかが来る。動物園からののはごい。シロクマ、ジャガー、カラカル（アフ



上：車に轢かれて頭部がひしゃげたテン。このあと私が半分剥き、細かいところは副団長が剥いた



上：仕上げを副団長にやってもらう。細かいのは苦手。皮を剥いてしまえば、魚みたい

リカのオオヤマネコ)、シマウマ、オランウー
タン(！)海遊館からイルカが来たこともある。
そのままで、せいぜい市役所の衛生課
が引き取って、焼却処分されるもの。



それを博物館で標本にする。従来なら、こ
ういう仕事は博物館の中で学芸員の仕事とし
て行われていた。それを、興味のある人対象
に、無料で、実習室を使わせて、やらせても
らえる！これは本当にすごいことだと思う。
きちんと学芸員の顧問が付いていてくれる
し、教育という面では、私はすごくいいな
と思っている。特に命とは、とか、そんな話
はしない。けど、解剖を通じて、学ぶことは
多い。何よりも、実物をじかに見れる。触れ
る。こういう機会はめったにない。



大阪の郊外にも、いろいろな哺乳類は住ん
でいるが、生きているのを見たりすることは、
まずない。博物館には「物好き」な人に各地
から、事故死した動物を届けてもらっている。
だから、ここで初めて見ることが出来る動物
も多い。私も、テン、アナグマ、ハクビシン、
ゴマフアザラシなどを、ここで初めて見るこ
とが出来た。鳥も同じ。普段、双眼鏡やスコ
プの向こうでしか見れない鳥を、ここでは手
にとつて見ることが出来るのだ。もう、これ
だけでも素晴らしい。こういうきかいをあた
えてくれた「なにわホネホネ団」に、感謝
である。

No. 14 松下ノ

活動報告

マッコウ鯨末記

2010年に大阪湾に漂着したマッコウクジラ。自然史博物館の標本となつて3年、今年の夏に全身骨格がお披露目されました。ここではマッコウの漂着から展示までの経緯をお伝えします。なお、漂着・解体などの詳細はホネ通11号のクジラ特集にありますので、併せてご覧下さい。

2010年

【5月22日 漂着】

当日、私は佐竹編集長率いるホネ団員数名とともに東京・国立科学博物館へ出向いていました。夕方、私と編集長の携帯に、ほぼ同時にそれぞれの家族からのメール。

「大阪湾にマッコウの死体があがつたってニュースでやってたよ。」

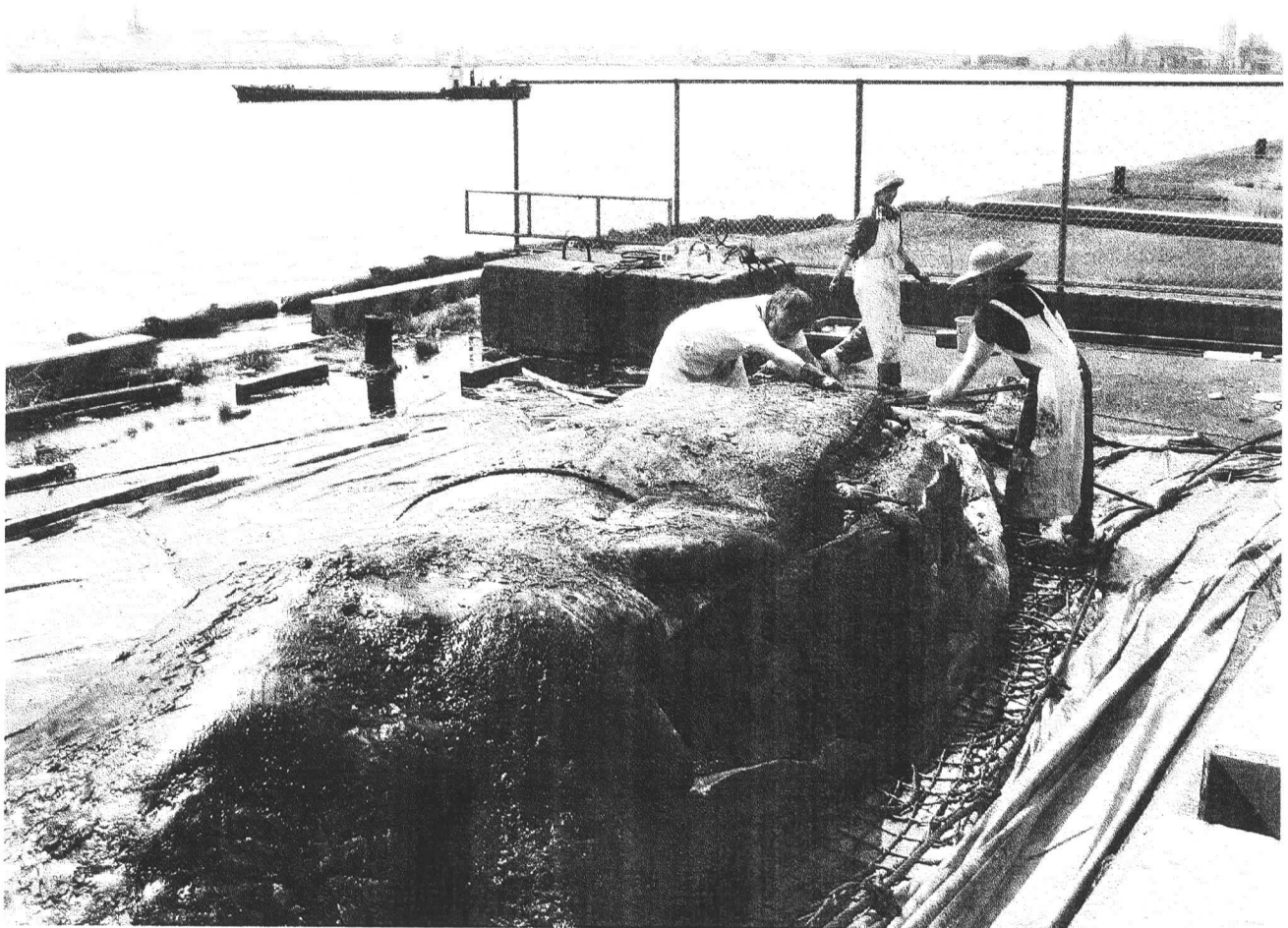
出先ゆえ詳しい情報が得られずもどかしさでいっぱい。当然、自然史博に来るものと思いきや、「埋設」なんて言葉が出てきたり、飛び交うメール情報やソースの曖昧なネットニュースに一喜一憂。帰りの新幹線の中、ずっと携帯を握りしめていました。いつ新情報が来るかと気が気でなかったたので、それにしても、速攻で漂着情報をメールしてきたホネ団の家族（しかも2組ほぼ同時）って…。

宙ぶらりん状態は数日続きました。要は、行政や法律の壁というか、どこがどう処理して、費用は？肉の捨て方は？というアレコレ

です。第一報を聞いた時は「私たちが帰るまで剥かないでー！」という焦りだったのに、まさか1週間も待たされるとは。博物館の廊下には解体グッズが準備されているのに、出番がこない。私も、団長も副団長も、動物研究室をウロウロしては学芸員さんたちに「現在、どんな話になっているの？」と聞き、交渉がんばってー！と応援する事しかできない毎日。「もし標本化されることなく埋めて終わり、なんてことになったら…」と思うと滅入って仕事も手に着きませんでした。今、思い出しても胃が痛いです。

【5月28日 処理法が決定】

やっと標本化決定。ホネは自然史博へ、肉は医療廃棄物として処理（海洋投棄はできないらしいです。一番簡単そうだし他の生き物のエサにもなるのに）。吉報はホネメールにも流れて団員も一安心…したと思いますが、解体作業は学芸員、団長と副団長、私、そしてホネ団からはクジラ経験のある浦野団員の10名でおこなうことに。ガツカリした団員も多いでしょうが、作業は岸壁だし（下の写真参照）、クジラ包丁や重機を使う現場で、団員が寄ってたかって剥くわけにもいかないので、ごめんね。そのかわり、館に搬入されたホネを砂場に埋めるお手伝い団員は募集、ということでご慢してもらいました。



左：解体中のマッコウ



【5月31日 解体当日】(詳細↓ホネ通11号)

エピソード1:現場は港湾の奥、普段は入れない所です。そこに乗り付ける我々の車。こちらが説明する前にゲートの係の人が「ああ、クジラですねー」と通してくれました。クジラの顔パス。

エピソード2:作業中、海上から船がマイク越しに「クジラ剥きのみなさいん！」と挨拶をしてくれました。府の研修で、港から臨海部を見学中、とか。「これ以上近づけませんんが頑張ってくださいー」とエール。遠目にも皆さんの笑顔が分かりました。レアな現場を見ましたね。おそろくクジラ臭は届いていたと思います…なんかすみません。

エピソード3:10時間も解体していたため翌日はさぞかし体のあちこちが痛んでいるのでは、と思っていました。翌日、一番つらかったのは「ノド」。潮風に吹かれながら、よほど大声を出してはしゃいでいたんでしょ。確かに、きゃあきゃあ叫んでいたわ:ちなみに団長も同じ症状だと言っていました。

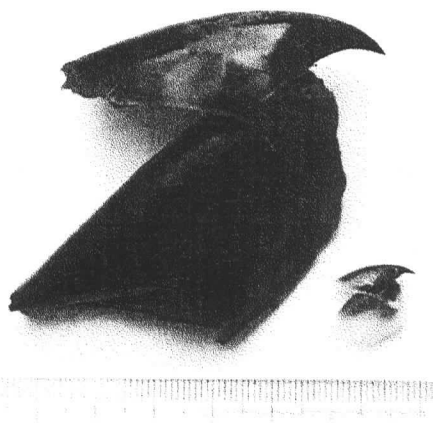
7時すぎに博物館に到着すると団員数名が待機していました。砂場に埋める予定でしたが、日も暮れていたため砂場に置くだけでこの日は終了。穴掘りと胴部のホネ埋めは、このあと数日かけて「博物館の最終兵器」と私が勝手に命名。樽野顧問が1人黙々とやっていました。

【6月6日 ホネホネ団活動日 頭の日】(詳細↓ホネ通11号)

さすがの最終兵器でも1人で2頭の頭(肉付き)は動かせず、というより、せめてこのくらいは団員もやりたかろうということで(??)、有志団員で頭を埋める作業をしました。指揮を取るのももちろん樽野顧問。数日後に陥没が始まり、夏にかけて「脳油カルデラ」が形成された経緯も併せてお読み下さい。

【12月24・25日 ホネホネ団活動日 墓堀り】(詳細↓ホネ通12号)

ホワイトエンジェルズその他小さきモノ達の活躍で、半年後に発掘が可能となりました。マッコウ一頭で砂場の大半を占めているので、肉が分解されたら早めに取り出すに越したことはなく、「クリスマス・ホネホネマラソン」の日に墓堀りです。陣頭指揮は当然最終兵器。ただ、この日に全てのホネは回収できず、取り出したホネも一部を洗っただけ。残りの作業は、後日やはり樽野さんが地道に



右:ダイオウイカ(写真提供:石田学芸員)

掘ったり洗ったりと寒空の中で奮闘してました。



2011年

【4~5月 一部お披露目】(写真↓ホネ通13号)

博物館の特別陳列展にて、マッコウの下顎と、胃から出てきたイカ類の顎板(目玉はもちろんダイオウイカ!)が展示されました。あれから一年。マッコウ、遂にデビュー。よかったですねえ。



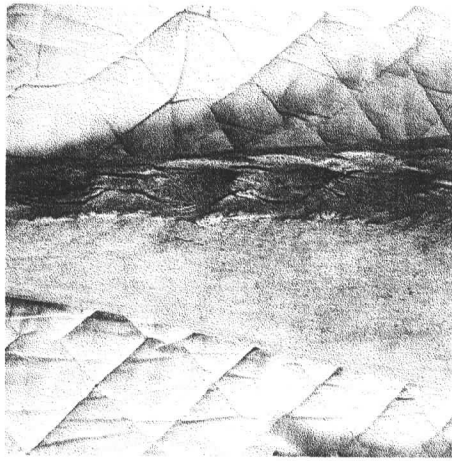
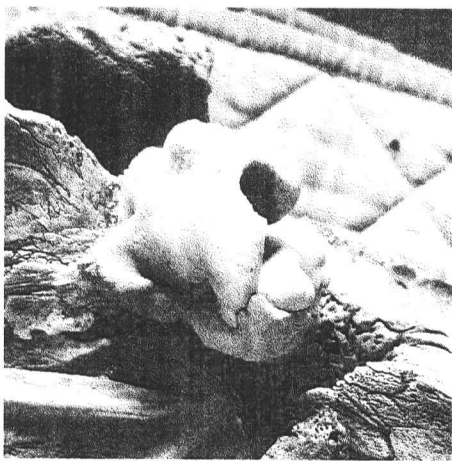
【9~11月 胃内容お披露目】

特別展「OCEAN! 海はモンスターで



右:搬出全景 京都の山奥にある業者さんへ運ぶための準備中。手前はバラバラになった頭部です。

いっぱい」にて、胃内容のダイオウイカ顎板が再度登場。マッコウ本人は収蔵庫でお休み中。解体時にウンコまみれになりながら顎版をザクザク掘り出し、ダイオウイカを見つけた石田さんが、会場のギャラリートークで当時を熱く語っていました。



右:耳骨と上顎。耳骨や上顎の歯槽がよく見えるのも、バラの状態ならでは。

2013年

【4月11日 組み立ての為に搬出】

今年の夏、自然史博物館では特別展「いきものいっぱい 大阪湾」を開催中（10月14日まで）。サブタイトルは「フナムシからクジラまで」。大阪湾最大のいきもの・クジラを代表して、このマッコウが目玉展示となりました（マッコウより大きいクジラもありますが、今回展示する全身骨格の中では最大）。ようやく全身デビューです。骨格標本という組み合わせが、博物館での収蔵の基本的には「バラ」。組むのは展示標本にする時です。ホネ団でもイタチ大以上のホネを組み立てることはあまりありません。組み立て作業は専門の業者さんにお願ひします（学芸員が時々チェックに入ります）。

クジラの耳骨は頭骨から脱落しやすく、現生・化石とも耳骨だけ見つかることもよくあります。解体中、耳骨のチェックができなくて（頭部は脂と肉まみれだったので）、発掘時に取りこぼさず回収できたのが気になっていたのですが、頭骨にしっかりと付いたままでした（15ページ写真）。よかったです。ついでに宣伝すると、クジラの耳骨は種同定のカギです。耳骨だけ見つかった化石でも種類や系統が分かったりします。重要ですよー耳骨。

なお、マッコウの上顎にも歯がありますが（15ページ写真）、肉の中に浮いている状態なので全身骨格とは別に収蔵しています。歯がないわけではありません。



【6月28日 おかえりなさい】

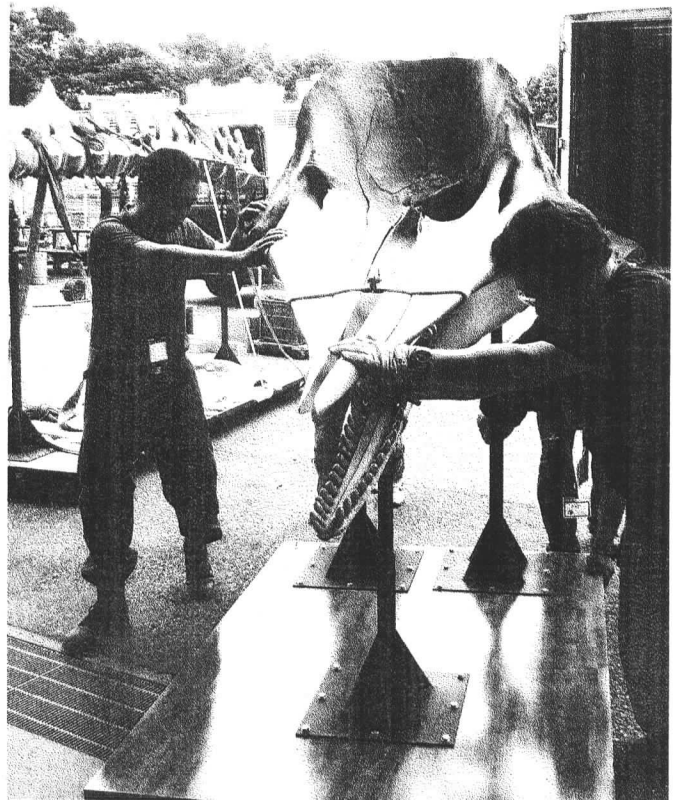
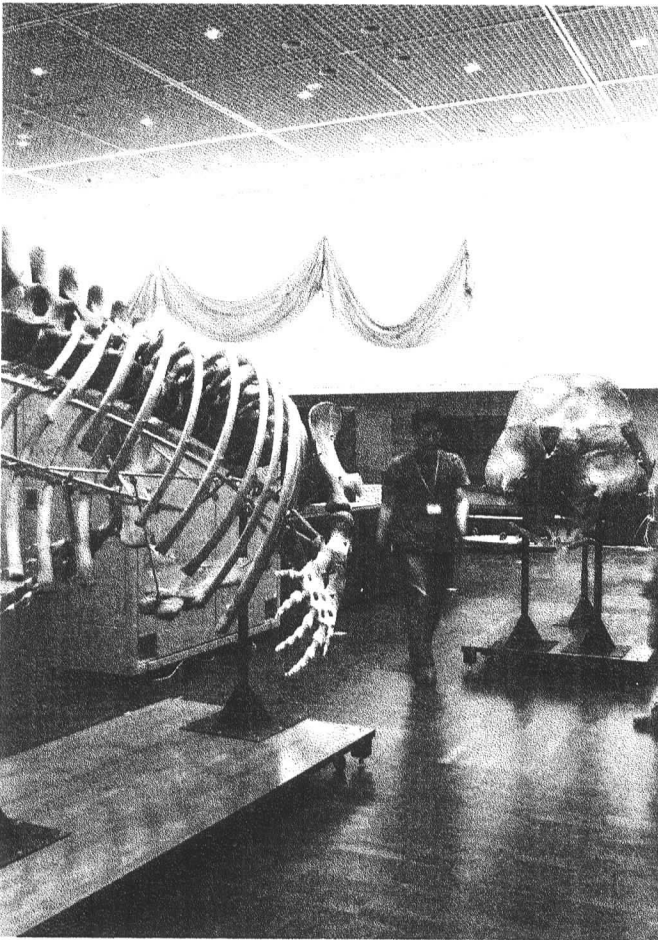
マッコウがデラック…もといゴージャスになって帰還しました。頭部・胴部・尾部の三分割状態です。クレーンやエレベーターで2階の特別展示室に運び、組み立てるのに1日がかりと予定していたら、あっさり半日で終了。ティラノのスーヤコウガゾウの設置に丸1日かかっていたので拍子抜けです。これも四肢のない（あるけどね）クジラならではの。

組み上がるとやはり壮観。頭が大きい！解体しホネ埋めの時にポロポロ崩れていった頭部が見事に復元されています。この時の報道に「マッコウクジラは体の1/3を頭が占める」とありましたが、それはオスの成体の話。このマッコちゃん（と解体時から呼んでいる）の全長は約9^歳、頭部は約2^歳。それでも、下半身のホネが少ないので頭部のボリュームには圧倒されます。

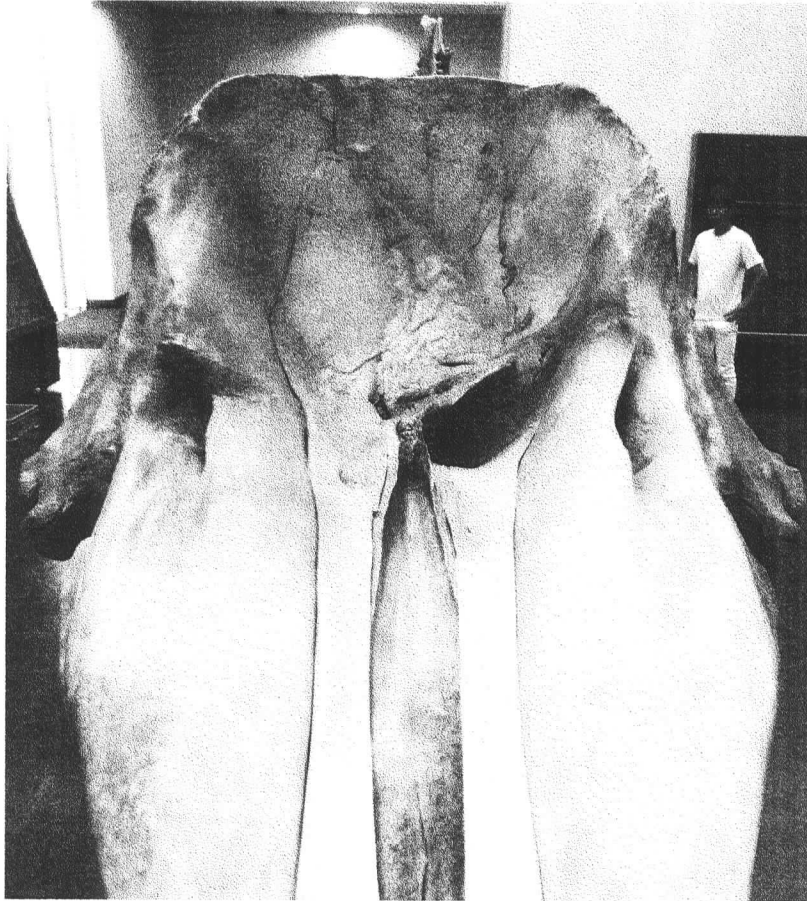
ハクジラ類は頭部の非対称が特徴。正面から見ると右側が左側を押すように傾いているのが分かります。鼻孔が完全に左に押されています。

後頭窩から頭の内部を見たところが、17ページ右上です。展示中には見られないアンクルです。隙間にウレタンが詰められています。このマッコウは特別展終了後、屋外のポーチでナガスクジラのナガスケの横に展示される予定なのですが、このナガスケがスズメに大好評でスズメ団地状態に。そして、その隙間を塞ぐためスズメと戦っているのがやはり最終兵器。今回はあらかじめ、営業されそうな穴は塞いでおいた、ということらしいです。

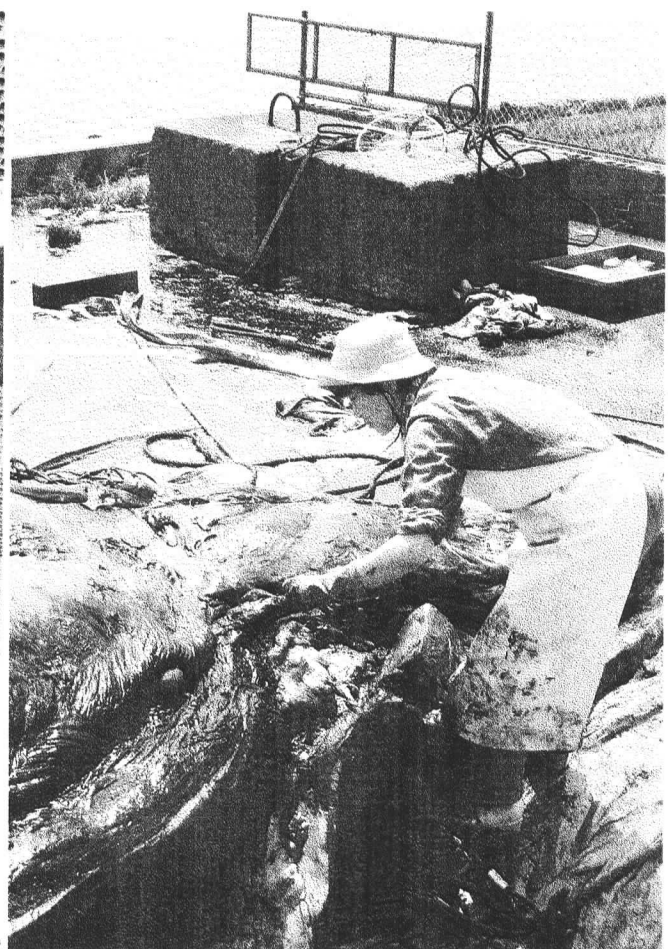
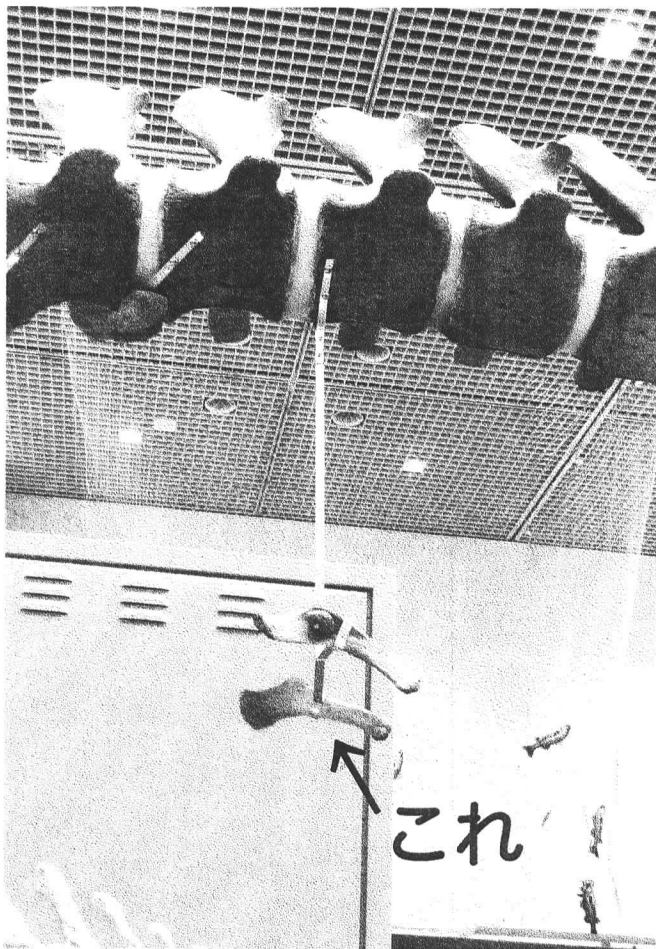
左：頭部と尾部、胴部の搬入



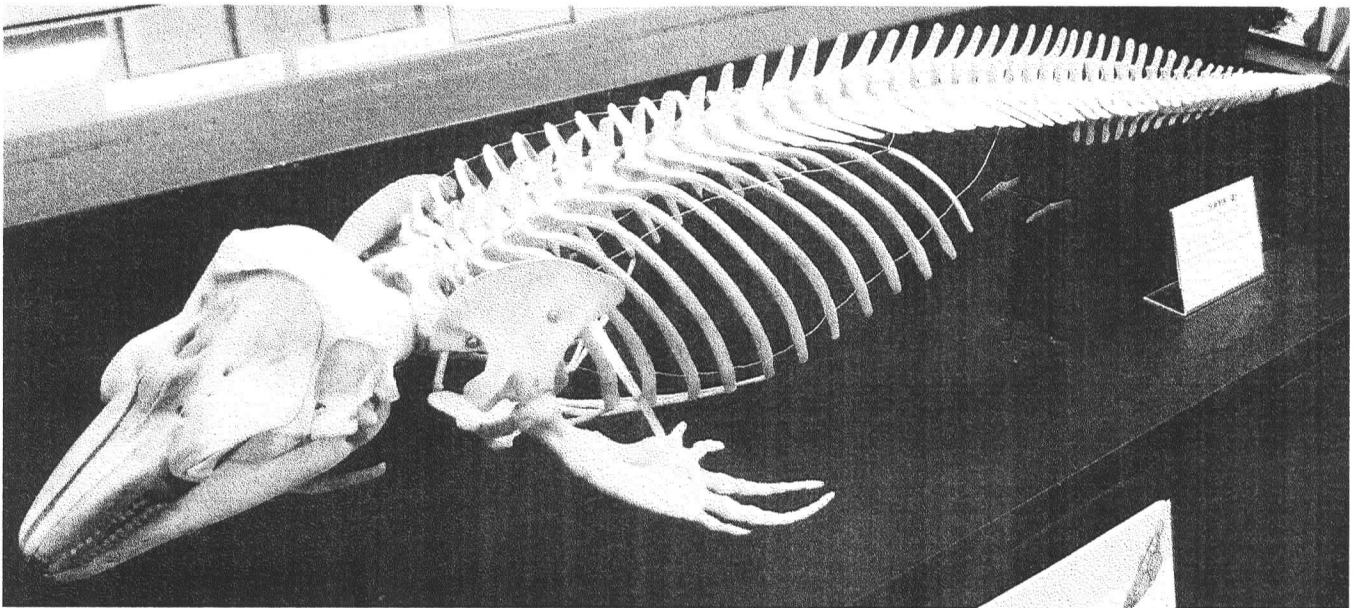
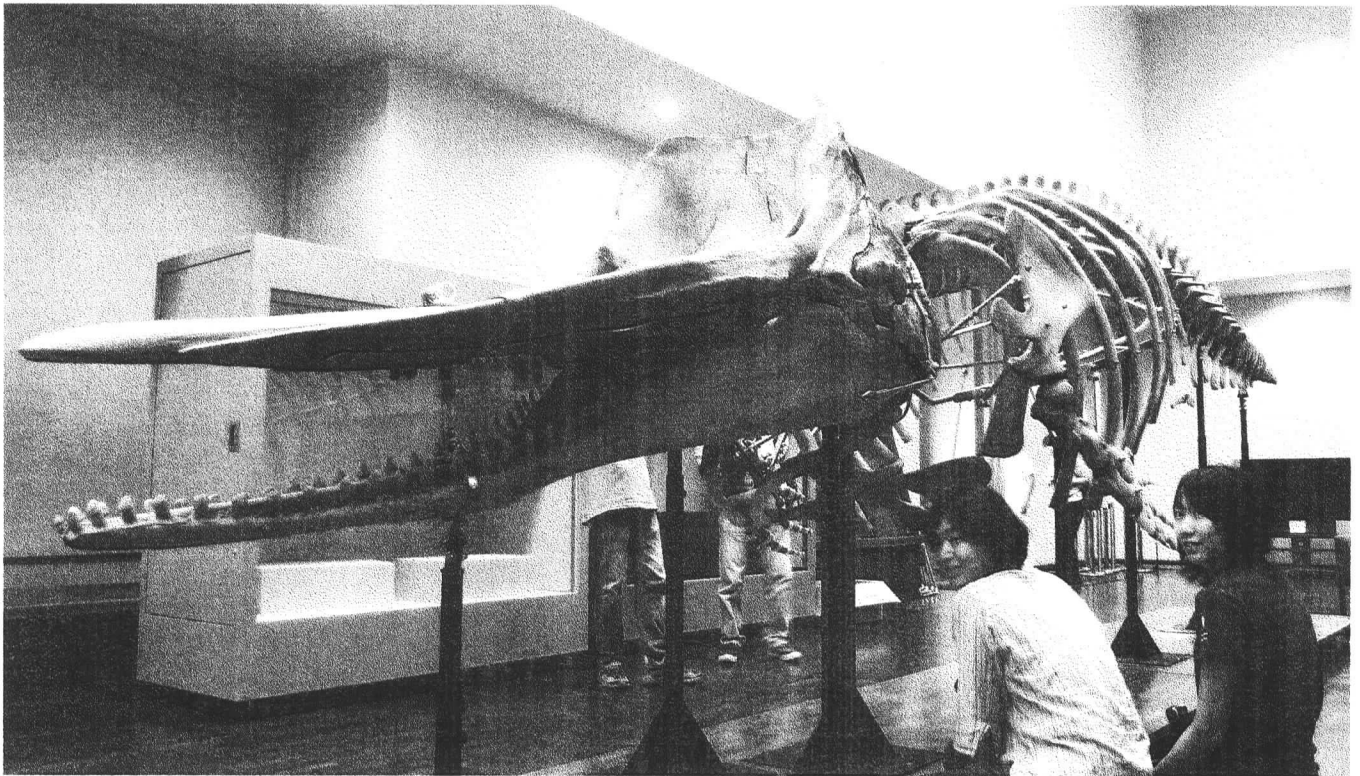
下：非対称の頭部



下：後頭窩から内部をのぞく



左：寛骨搜索の様子と展示中の寛骨



上：最大のハクジラと最小のハクジラ

解体時のマイ最大ミッションは「寛骨を回収すること」でした。半泣きになりながらも無事に入手した寛骨が、こんな立派な姿になって（感涙）。大腿骨の名残まで残っています（17ページ写真）。

【7月20日 特別展はじまる】

発見から3年2ヶ月、「大阪湾」展がはじまり、ついにお披露目です。なぜか（↑ここさりげなく強調）愛称も募集。上から下から、間近に眺められるのは特別展の時だけ。みなさん彼女の勇姿をご堪能下さい。9月でこの迫力です。オスの成体（20歳近い）だったら展示室いっぱいいっぱいになっていそう。

おまけ：マッコウ解体の前にはスナメリ剥きも続きました。特別展では、マッコウ漂着の1ヶ月後に漂着・解体した大阪湾産スナメリの骨格も展示しています。まだ入団前の浜口とり団員をはじめ、ホネ団イルカ小隊で剥いた「焼きギョーザ」のあの子です。ハクジラの最大種マッコウと最小クラスのスナメリが大阪湾で見つかり、この展示で同時に見られるというのは中々すごいことだと思うんです。

9月14日に、募集していたマッコウの愛称が「マッコ」と決まりました。もつとも、内輪では解体中から「マッコちゃん」などと呼んでいたの（過去のホネ通でもそう呼ばれていた）、先述でもチヨロツと呼んでみたり、全然「マッコ」じゃない名前になった

らどうしようと勝手にヒヤヒヤしてしまし
た。マッコに決まって正直ホツとしています。
ほかには「マコ」「クー」「マコリン」などが
あったそうです。いずれも「マ」「コ」「ク」
あたりは外せないのは誰しも同じ気持ちだっ
たのかな。やっと堂々と「マッコちゃん」と
呼べるー！ やったやった。あ、団長周辺で
のフルネームは「サカイ・マッコ」です。勝

手に決めています。そういえば団長と同名。
組み立てられてデラックスになった、と最初
に言ったのは確か事務局長です。

橘麻紀乃



右：愛称は「マッコ」に決定

やったー！！

ホネホネ団 ホームページアドレス

<http://www.geocities.jp/naniwahone/index.html>

主なコンテンツ

- ホネホネ団とは
- 入団・見学について
- ホネホネ団通信バックナンバー
- 死体に出会ったら
- 団員の個人ページ紹介
- 関連グッズ紹介
- 東北遠征団 ←coming soon!



東北遠征団のページ、まもなく開設します！

活動報告

イデザインフェスタ vol.37

五月十八日、十九日の二日間「デザインフェスタ vol.37」が開催されました。会場は東京ビックサイトの西ホール。かなり広いです。ブース数は約三千、出展アーティストは一万を超えたそうです。出展方法は様々で、展示販売をする方もいれば、ショー等のパフォーマンスをする方もいました。いろんなジャンルのアーティストが思いをこめた作品を出展していました。このレポートでは、私目線ではありますが、デザフェス1日目の様子をお伝えします。



なにわホネホネ団デザフェス部（非公式）のブースでは、団員さんの私物標本の展示をしたり、手作りの作品を販売したり、鳥の仮剥製作りの実演もされていました。隣にも骨に関する作品を出展されているブースが並び、なかなか骨密度の高い一角となっておりました。そんなホネホネには来場者がたくさん来ていました。仮剥製作りの実演を覗きに行く人とだかりができていて、きつと皆さん普段生の骨や剥製を間近で見る機会が少ないので、熱心に作業の様子を覗いていました。私、「アートにも生き物にも興味を持つ人が増えたら良いな」という思いを持っているので、あの人だかりを見て、出展者でもないのになんだか嬉しくなりました。



他のブースでも生き物系の作品を出展している方達が思った以上に多かったことに感動しました。カワイイものからカッコイイものまで。個人的には、ロイコクロリジウムに寄生されたカタツムリのアクセサリがすごくツボでした。もうあの作品には出会えないかもしれないので、買わなかったことにいまさら後悔しています…。もう一つ感動したことは、うるしを使った作品を作っている作家さんがいたことです。私うるしを専門とするため日々勉強しているので、嬉しくて嬉しくて堪らなかつたのですが交流し損ね、これも後悔…



会場を回っていると、ライブペイントをしている方を発見しました。かなり大きなキャンバスに、アーティストさんはその場で絵を描いていきます。ライブペイントは学校の文化祭でしか見たことがなかったので、かなりの迫力に圧倒されました。ステージでは、ファッションショーや音楽の演奏、体で表現するパフォーマンスもしていました。時間が足りず観に行けませんでしたが、今回見られないものや、2日目にしか出展していないブースもあったのでちょっと残念でした。次に行く機会があれば二日間参加してステージでのショーもしっかり観たいです。



デザフェスは、アートの道を志す私にとっては、一度は行っておきたいイベントのひとつでした。普段自分が接する機会の少ないジャンルの作品や作家さんに会えて、生で作品への想いや熱意を知れたことが面白かったですし、ジャンルにとられず様々なもの

に興味を持つことで、自分の世界が広がり、制作意欲もわいてきました。今回とても良い経験になりました。誘ってくださいました皆様ありがとうございます。

上田彩乃



右：なにわホネホネ団デザフェス部（非公式）のブース

活動報告

手羽先WS in 鹿児島



思い起こせば、3月に入団試験を受けた後の飲み会で「手羽先WSを鹿児島でしたいんです！」なんて本気なのか冗談なのかわからないようなことを言ったのがコトの発端でした。結局、鹿児島に帰ってから職場で行なうWSの日程や内容やらを組んでいる時に、せっかくだからやってみようかということに。



「試作すらしたこと無いのに、出来るのか？」と思いつきながら団長に泣きつく他力本願っぷりを炸裂させ、気付くと申込は満員御礼になり本番間近：そして、8月25日(日)の本番を前に、団長、トリちゃん、乾さんの遊沙ちゃん、倫くんが来てくれました。で、調理室に荷物運んだり、道具の確認したりして、遠征組は桜島に(笑) 予想通り、海で遊ぶというあって別々に) 見て、居酒屋で合流。鶏屋さんを選んで正解でした。トリちゃんが鶏の品種について丁寧に解説してくれます。もちろん鶏刺の食べ比べもします。ちなみに、花火仕様で浴衣飲み会でした。いやーよく食べたし、よく飲んだ！翌日のWSのことなんか忘れるほどに：残念ながらトリホネは手に入らなかったけど、鶏飯までおいしく食べて解散。



さて、翌25日はいよいよ本番。子ども19名+保護者と、職場スタッフ4名の研修生で9時半にWS開始です。ここで、佐竹さんのウズラのホネ写真や、スズメの羽根付き翼の写真が活躍します。実は、5月に職場の企画展でホネホネ写真展として、佐竹さんの私物標本写真展を使用していただきました。大変好評で、第2回も出来たらいいなーなんてこっそり思っています。ひとまず、この場を借りて御礼申し上げます。



スケジュール的には、サクサク進んでほぼ時間通りの進行でしたが、作業量から参加者の集中力も後半は徐々に切れていく：なので、進化のお話とか、団長のお話を聞く時間がしっかり確保できなかったのが心残りです。今度、開催するときは、その辺もなんとかしたいですね。それでも、何とか全員、手羽先標本を作り上げることが出来て、満足そうでした。16時、終了後は、撤収作業をしたあと、倫くんの希望で「黄熊」を食べに！！

※黄熊とは、白熊の黄色いもの。

マンゴーが山盛りに乗っかっています。



その後は、歩いて腹ごなししつつ、居酒屋さんに残った手羽先を持ち込み、調理してもらって飲んだくれ反省会。乾さんは、高速バスで帰路に着くので、ビール1杯だけでお別

れでした。お見送りした後、ガッツリ飲んで、翌日のバードウォッチングの計画を練って解散：なのに、翌日は、土砂降り。残念ながら、カツオドリのダイビングは見られなかったけど、キジとかソリハシギとかは見られました。最後は、飛行機ウォッチングと足湯を楽しんで、手荷物預けで走って(笑) お別れました。こゆーい3日間をありがとうございました。(あれ？WSのこと、あんまり書いてないですね：)



後日談。翌日はカツオドリダイビングがバッチリ見えたそうです。

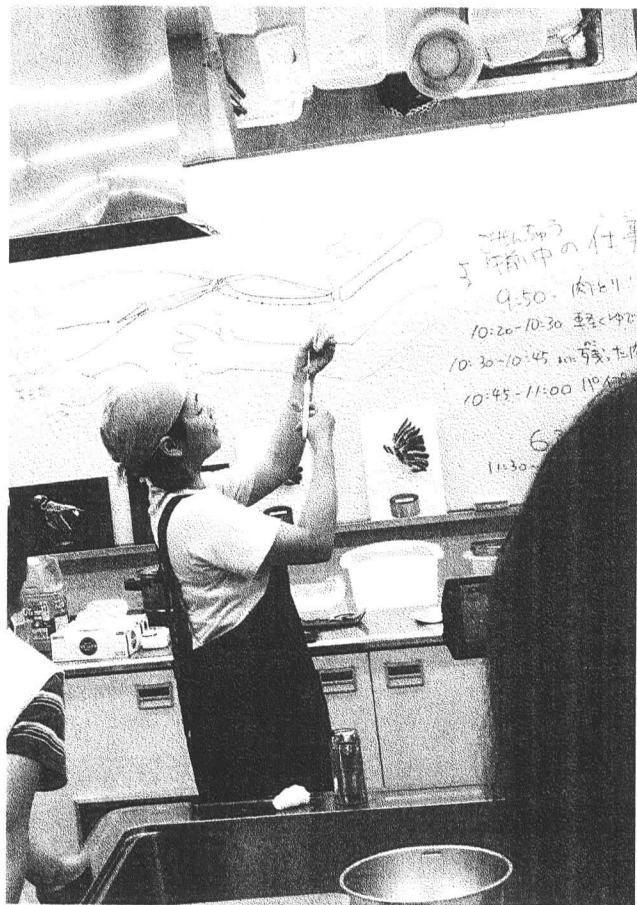
YUKI

大波心算

身近なホネホネ

鹿児島市の県民交流センターで、企画展「みんなでホネホネカーニバル」が開かれています。カエルやニワトリなど身近な生き物の骨格写真59点が並ぶ写真展。30日まで。

骨格写真は、博物館などに標本を保存する団体に「なにわホネホネ団」が撮影したもの。企画した県環境技術協会コーディネーターの川上幸恵さん(30)によると、翼のないトリの骨格に来館した子どもたちは驚くという。



上：ワークショップの様子

左：2013年6月9日南日本新聞より

会場には大阪で2012年に事故死した雄のアライグマの骨も展示。器用な指先は、人間と同じ5本指だ。川上さんは「魚や鶏肉を家で食べるときにも、動物たちはどんな体をしてたのか、興味を持ってもらえたら」と話している。

私物 標本

ホネホネ団には私物の標本を所有している方が多数いると思われます。拾ったホネや、組み立てたりもらったホネ、ホネにする予定の死体など。さまざまな私物標本も紹介していきたいと思います。

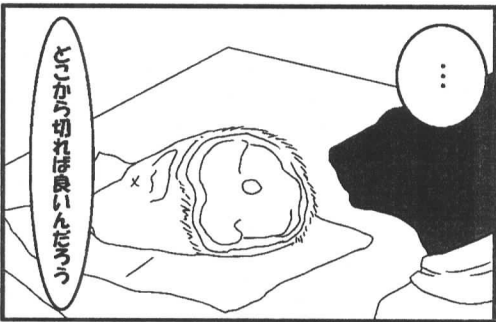
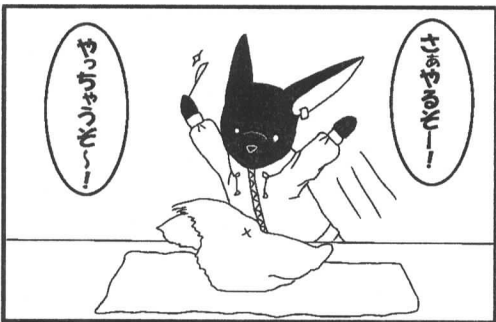
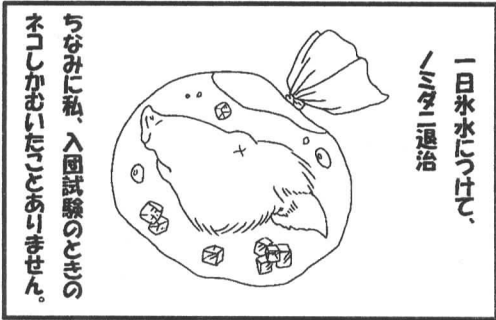
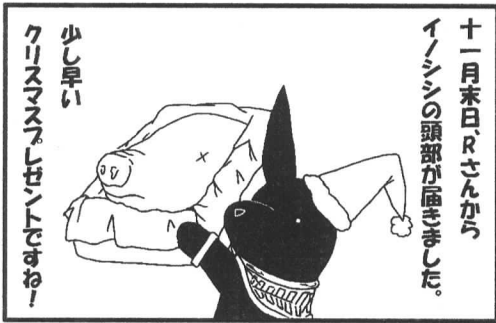
イノシシの頭骨標本を作る

去年の11月の終わりに、Hさんからイノシシの頭部が届きました。猟友会にお父様が所属しているらしく、狩猟の時期(害獣駆除時期)だそうです。その際に獲れたもので、頭部欲しい人いませんか?というものでしたので頂きました。ありがとうございます。犬

歯や鼻の骨の発達具合から若い雌でした。イノシシの頭を丸々剥くのは初めてです。頭部解体は動画で見たり、活動日に私物のものを手伝ったりした事はあるのですが、動画を見てから8ヶ月程度経っていますし、手伝いも途中からだったので少し自信がありません。入団試験時にネコを1匹剥きましたが、これもまた3ヶ月は経っていて曖昧でした。美術解剖学の一環として学校でやっても良いということだったので、場所には困りませんでした。直接学校に送ってもらったのですが『骨格標本』とあるので、団に所属していることを知っている方に、これでもしかして…と聞かれました。あ、はいそうです。ちなみに生です。すると、そこにいる事務の方々に驚かれましたが、応援してくれたり、若干怖がりつつも(未開封なのに…笑)興味津々だったり。良いリアクションですね! ありがとうございます! 1日はノミ、ダニ駆除

のため、氷水につけておきました。そして翌日、とうとう皮むきです! 準備をしていざ! …どこが皮なの? どこから脂肪なの? どこから切ればいいのかわからない。皮膚も脂肪もどっちも白いから区別できない! のっけから躓きました。できるだけ薄くむいた方がいいという事は分かっていたのですが、どう切り込んでいけばいいのかわかりません。恐る恐るメスを入れています。それでもやっけていくうちに、あ、これ結構脂肪残して厚くむいちゃったな…っていうのが分かってきます。皮をなめすときに、すぐく面倒なんだろうなあ。それにしても、イノシシの脂肪は、おはぎのご飯粒みたいですね。少しづつづつしていて独特です。後頭部から鼻先へ向かって剥こうと思っていたので、最初の関門、耳。ここを剥かないとめくれない。しかしここでも躓きます。耳ってどうしたか

わかりません!



なあ…なんかネコのときは耳の付け根の切り方が甘いかどうか…でも耳は軟骨だし、結局それ抜かなきゃいけないよね? とりあえず剥こう。と思って耳を切り取らず、頭骨につけたまま皮を剥くことにしました。(こんなことしなくても切つてあとから剥けば良かったらしい。なーんだ。) 耳には脂肪や肉はほぼないので、うっかりすると皮に穴をあけてしまいます。慎重に慎重に。まず右耳! 首回りの皮を大まかに剥いていたので、すでに脂で切れにくくなっているメス。切れ味が良いと、スパアンといって穴をあけそうなので、これくらいで調度良いと思っていました。耳の裏側が綺麗に剥けたし、いいかんじ! と思つたのもつかの間。穴、開けました…。油断大敵。その後も何ヶ所か穴をあけて、右耳の軟骨部分終了。さすがに耳は難しいと思いつつ、今度は左耳。少し怖かったけど、今度はこつこつやってみようかな、と切れるメスに変えてみました。皮を引っ張って出てきた繊維質の組織を切っていくのですが、こういうぎりぎりの場合って、繊維質を切っていくというか、繊維質の根元を切っていく方がいいですね。勉強になります。そんなこんなで左耳は穴開けませんでした。ヤッター! 切れないメスの方が怖くないと思つていましたが、繊細な作業をするときはむしろ切れる方がいいかもしれません。無駄な力が入ると余計失敗するかも。軽く滑らせて切るのがミソです。多分。そして更なる分からない。鼻! 調度翌日にTさんが別件で学校に来ると言う事だったので、レクチャーしてもらうことに

続・わかりません!!

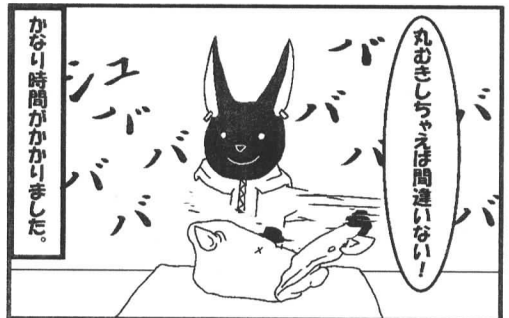
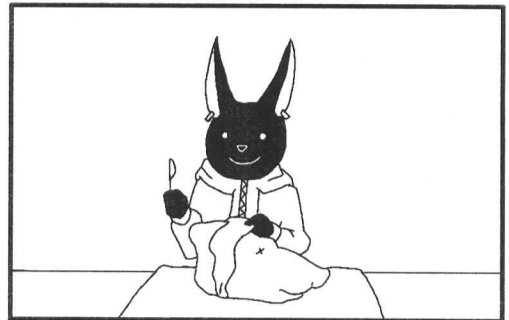


結構むけてきました。
さうさう耳をはさむおぼ。



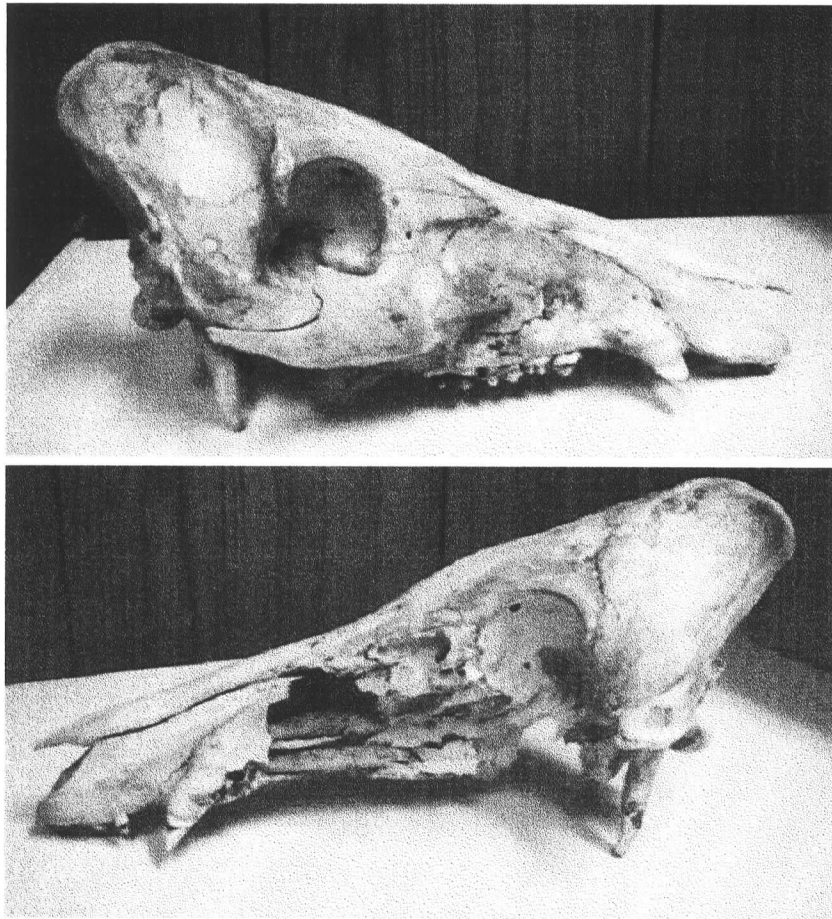
軟骨は抜かなきゃ
いけないんだよ

…ん？
耳でさうやっただけ？



かなり時間がかかりました。

丸むきしちゃえば間違いない!



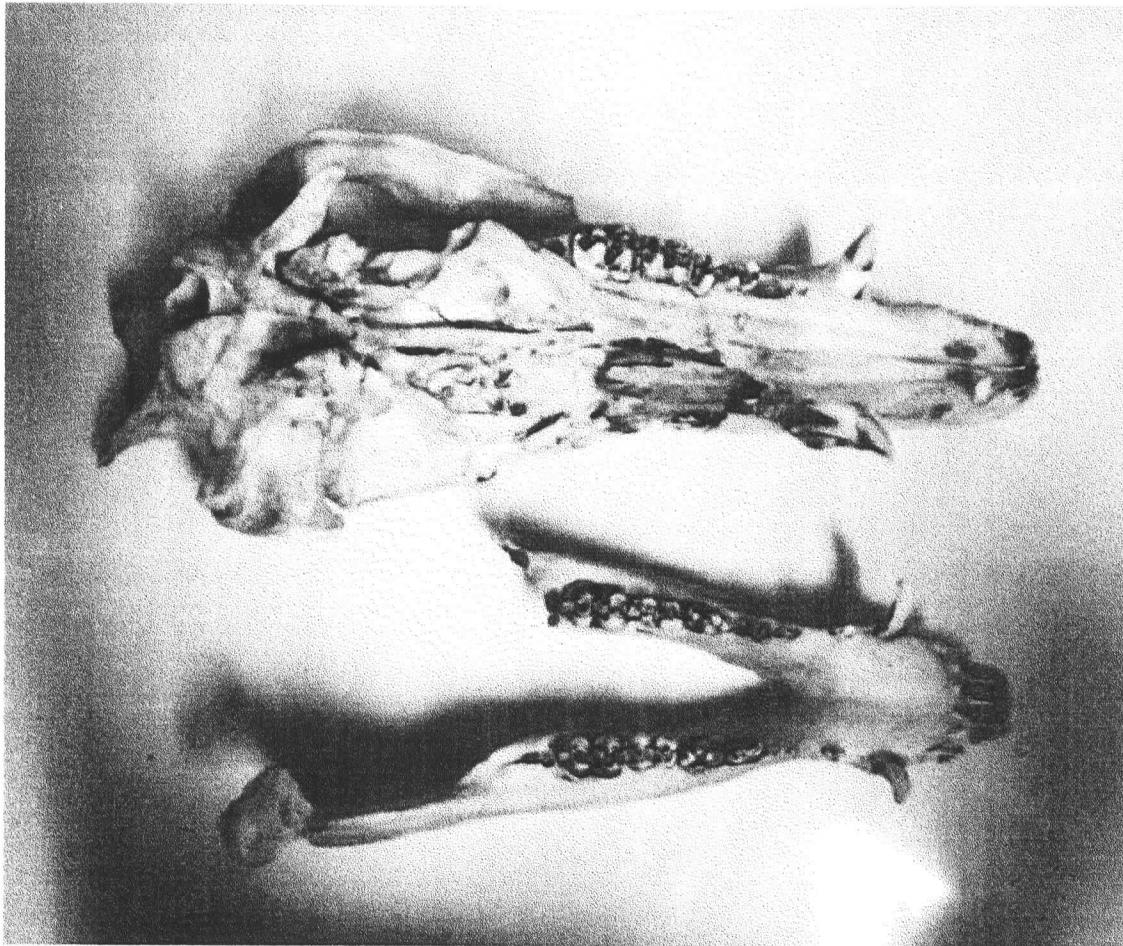
上：完成したイノシシ頭骨

しました。そして予定通り翌日に教わり、豚鼻は皮と同じ要領ではぎはぎして良いようです。はぎはぎ。

皮を完全にはぎ終えたので、次は除肉。の前に目や脳を取りだすんですね。実は私目が一番苦手でこの時は取り出せずにいました（今は大丈夫です。相変わらず気は進みませんが、できます。慣れつつございますね）。気持ち悪いというより怖い。Tさん、ヘルプー！とりあえず後頭部の肉を剥いていることにしました。しばらくして、別件の用事を抜けてきたTさんが！目を抜いてもらいました！速い！そのノリで左頬側も風のごとき速さで肉を剥ぐTさん。もうもどらなくと戻っていったのですが、その間5〜10分くらい。雑談しつつパパパパと…こ、これが実力の差…！経験の差…！舌骨部分で少し苦戦。当り前ですが、鳥のように簡単に

は取れませんか。再びTさんがお手伝いしてくれました！しかも現代アート領域の1年生の子を2人連れて。2人とも興味があるみたいです。Tさんのレクチャーの元、顎の腱を切って上顎と下顎に分解！なんだか分裂すると骨格標本っぽさが増す気がします。下顎の大まかな除肉をし、細かい所は1年の子に手伝ってもらいました。お手伝いを頼むとすごく喜んで引き受けてくれて、体験として楽しんでもらえたようで良かったです。肉を取ってみると、意外と下顎も割れていました。仕留めた時に下顎まで弾丸が当たったのでしょうか。左上顎はもろに弾丸を受けた場所。除肉してみると意外とバラバラ。これは復元しようにも挫折するレベル。でも、砕けてもカツコイインじゃないかな？と思うし、右半分は無傷だし。オッケー！大体除肉が終わったところで、後は脳を出して、ひとまず終了です。このころになると、卒業制作で追われてきたので放置がしばらく続きます。新聞紙にくるみ、ごみ袋に入れて、時々いじっていたとはいえ2ヶ月ほど放置していました。アパートの玄関に置いておいたのですが、全然異臭はしませんでした。極力除肉したという事もあるかもしれないけど、冬だからかな？そして春！冬に貰ってもう春になっちゃいました。引越しもすんだところで今度は脱脂します。じんわり保温すれば脱脂できるという事を教わり、40度のお湯でじんわり保温。時々お湯かえ。

とうとうできました！イノシシの頭骨。



漂白はしなかったので真っ白ではないですが、このナチュラルな色も好き。左上顎は砕けすぎて除肉の時に無くなってしまったけれど、中を見られるのも良いですね。ちなみに下顎の一部は今水につけてる最中です。今回

ほとんどの作業を学校でできました。場所は広いし大きい流しもあるし外に水道もあるし、家庭用ですが冷凍庫もありました。でも、やっぱり教室の共有冷凍庫を使うのはちょっと...と注意されることもあったし、教室で

やっていたので、人は少ないとはいえ苦手な人もいると思うし...と思うと肩身が少し狭かったです。一応段ボールの陰に隠れてコソコソやっていたり、人の少ない休日を狙って作業したり、人体研究室を借りて作業したりも。注意されてからは同じく人体研究室の冷凍庫を使わせていただきました。学校に標本作り用の部屋ができれば良いのになあ。こういうのってきつと裸体と同じ感じなのでしょうね。美大生でヌードデッサンしたり見たりしてもどうってことないけど、一般だとヌードデッサンってだけでビククリされたり卑猥って思う人もいるし。分かってはいるけどなんだか腑に落ちない感じもあります。まあ標本はグロ以外にもいろいろ障害がありますが。



そして前述しましたが、学校でやっていたので見学者も来ました。除肉の時に手伝いをしてくれた現代アート領域の子が、後から同級生を2人連れて来てくれたんですけど、今日見学に来た4人ともが貴重な体験と言ってくれたので嬉しかったです。肩身が狭い思いますが、こうやって喜んでもらえるのも意義なことできているのかな、よかったです。と思えます。興味はあるけれど、よく分からないという人は多そうです。ちなみに！獲れたての新鮮だったので、削いだ後はゼミのみんなでシシ肉パーティをしました！本当にありがとうございます。

藤村直加

広告

— 好評発売中！ —
『猫にもできる豚足くん』

乾公正 著
2008年刊 12ページ
簡易製本 価格 300円

わかりやすい！



かっこいい！

頭部だけ 10人分 180g/1パック



おいしい

ほね本紹介

「自然の中の絵画教室」

著者 布施英利
 出版社 紀伊国屋書店 (2002/10)
 ISBN 978-4314009263
 価格 1890円



「美」は自然から学ぼう!

数年前、滋賀で行われた日本美術解剖学会で講演をされた布施先生が、なんだか面白そうなお本を出しているなどと思い、手に取りました。よい絵を描いたりよい作品をつくるために、美的な感性を磨くこと。そのために美術館に足を運び、複製ではない実際の作品にたくさん出会うこと。そして何より自然の中の「本物」に触れるため、野山を歩いたり、海にもぐったり、ときには生きものを飼育したりして体験を積みましよう、とさまざまな体験を勧めてくれます。美術を目指す中高生くらいのあるいはそんな心持ちの大人の一人たちを対象に書かれた入門書です。

その中に、死体を拾って解剖しよう、腐らせてみよう、骨の標本を作ろう、という章があります。布施さんは建物の屋上でバケツに死体を入れて(きつと、わたしたちのよう

にそれほど除肉とかせずに)腐らせてえらい目にあつた経験があるそうで、それに比べると森の中の死体はぜんぜん臭くなく、あつという間にシテムシやハエがやってきて分解されて行く様子は「ウジなんかまるまる太ってぴちぴちして、生きる喜びにはじけているように」。なんだか、ホネ団のいう「白い天使たち」に共通する感覚です。出来た頭骨はキレイに洗って部屋にかざります。

ちよつと意外だったのは解剖の項でした。拾つた死体は、新鮮なうちに、とにかく好きになうようにバラバラにしなから、筋肉や腱を引つ張つたり、触つて観察したり、内臓の色に注目したり、頭骨をくつきながら(!)脳をながめたりします。そうやって、じっくり死体を見たら解剖は「おしまい」。この後、頭骨もくだかれた死体は処分されてしまつたようでした。

私はここを読んで、つい「あれっこれで終わり? うわーもつたない」と思つてしまいました。でも、その後、最初はこれだけで終わつてもいいのかもと考え直しました。かくいう私も最初の解剖(高一でムササビだった)のときは標本の意味など知らず、ひたすら内蔵の美しさに驚嘆して、いじりまくつて、バラバラにしただけでした。残したのは内蔵の液浸もどきだけ。頭骨くらいは冷凍したかも知れないけど、あとは穴掘つて埋めてました。でもあのときの体験は強烈に残っているし、ムササビの手ざわり



すら思い出せます。ホネホネ団で活動していると、なんとなく死体はすべからく標本に! そももつて博物館に置いとくのがベスト! となつてしまつているけど、死体はまず拾つた人がどう付き合うか決めればいいものだよな、と、視界が狭くなつていた自分をちよつと反省したりしました。

本物の死体に触れて「死」に迫つたあとは、生きているつてどのような状態か、自分自身の体の「生きた」手や指、関節を曲げたりしてよく眺めもう一度感じ直すこと。そして、



ここでの気付きをかならず、次に描く絵に込めるように、と布施さんは締めくくります。「美」は自然から学ぼう! というシンプルなおススメの本です。

西澤



5月3日

場所：大阪市立自然史博物館 実習室

時間：10時～22時半

担当：副団長、事務局長

参加者数：19名(見学者4名 ↓新人団2名)

内容：キンバト8体、キジバト1体、ヤマシギ1体、ヨタカ1体、ハシボソガラス2体、ハシブトガラス2体、ムクドリ2体、シロハラ2体、アライグマ1体、テン1体の皮剥き。
春の合宿の初日は、鳥の日。西表島鳥類調査隊の活動6回目。



5月4日

場所：大阪市立自然史博物館 実習室

時間：10時～20時40分

担当：副団長、事務局長

参加者数：34名(見学者12名 ↓新人団3名)
内容：イタチ14体、テン1体、タヌキ1体、ヌートリア2体、キングペンギン1体の皮剥き。
春の合宿の2日目は、今年2回目のイタチの日。



5月5日

場所：大阪市立自然史博物館 実習室

時間：10時～20時

担当：団長、副団長、事務局長

参加者数：34名(見学者6名 ↓新人団2名)
内容：キンバト6体、ドバト1体、オオハナインコ1体、ヒツジ(サフオーク種)1体、ヤギ1体、モルモット1体、コビトマンゲイ1体、トウブハイロリス1体、アライグマ1体、テン1体の皮剥き。
キングペンギン1体の処理の続き。春の合宿最後は、ヒツジの日。西表島鳥類調査隊の活動7回目。



6月8日

場所：大阪市立自然史博物館 実習室

時間：10時～21時

担当：事務局長

参加者数：19名(見学者5名 ↓新人団なし)
内容：ダチョウ1体、スズガモ1体、キンバト7体(内3体は仮剥製にならなかった)、アオバト1体、キジバト1体、ハシブトガラス1体、ツバメ1体、ヒヨドリ2体、ムクドリ1体の皮剥き。
鳥の日。西表島鳥類調査隊の活動8回目。



6月15日

場所：大阪市立自然史博物館 実習室

時間：10時～18時半

担当：副団長、事務局長

参加者数：37名(見学者12名 ↓新人団なし)
内容：メガネグマ1体、フタコブラクダ胎児1体、イノシシ1体、ネコ1体の皮剥き。
ダ

チョウ1体の皮処理。大物の日。ラクダの皮も準備したが断念。



7月6日

場所：大阪市立自然史博物館 実習室

時間：10時～18時半

担当：団長、副団長、事務局長

参加者数：28名(見学者8名 ↓新人団2名)
内容：ヤギ1体、カイウサギ1体、アナグマ1体、ハクビシン1体、タヌキ1体の皮剥き。
フタコブラクダ1体の皮処理。ヤギの日。ラクダの皮は今回も途中まで。



7月20日

場所：大阪市立自然史博物館 実習室

時間：10時～22時45分

担当：副団長、事務局長

参加者数：14名(見学者4名 ↓新人団なし)
内容：ハシボソミズナギドリ5体、ズアカアオバト2体、キジバト1体、アマサギ1体、チュウサギ1体、ホトトギス1体、アカシヨウビン1体、アオバズク1体、トビ1体、ツミ1体、ハシブトガラス2体の皮剥き。
鳥の日。西表島鳥類調査隊の活動は休憩。



8月4日

場所：大阪市立自然史博物館 実習室

時間：10時～19時10分

担当：団長、副団長、事務局長

参加者数：36名(見学者19名 ↓新人団なし)
内容：ヤギ1体、イノシシ1体、カイウサギ1体、ネコ1体、テン1体、ハクビシン2体、

アライグマ1体、タヌキ1体の皮剥き。スナメリ2体、イノシシ1体の処理。キングペンギンの皮処理。ひたすら皮を剥く日。愛知県と福岡県から見学。



8月17日

場所：大阪市立自然史博物館 実習室

時間：10時～21時50分

担当：団長、事務局長

参加者数：17名(見学者2名 ↓新人団なし)
内容：オシドリ1体、ドバト1体、ハシボソミズナギドリ4体、チリーフラミンゴ1体、ホオジロカンムリヅル1体、トビ1体、オオコノハズク1体、アカハラ1体、シロハラ3体の皮剥き。
ダチョウ1体の肉取り。鳥の日。今日も西表島鳥類調査隊の活動は休憩。フラミンゴは洗った。



8月18日

場所：大阪市立自然史博物館 実習室

時間：10時～20時

担当：団長、事務局長

参加者数：13名(見学者2名 ↓新人団なし)
内容：キジバト1体、ハシボソミズナギドリ1体、シロハラクイナ1体、タシギ1体、コアジサシ1体、トビ1体、ハシブトガラス2体、ヒヨドリ1体、ツグミ1体、スズメ1体、イカル1体の皮剥き。

備考：鳥の日。今日も西表島鳥類調査隊の活動は休憩。コアジサシは洗った。



取材記録と

遠征報告

5月

18・19日 団員の有志チーム「なにわホネホネ団デザフェス部(非公式団体)」、東京の『デザインフェスタ vol.37』に出席。小原団員の骨バッジ、藤村団員のカラスの全身骨格ボスターが好評。鳥の仮剥製づくりの実演には黒山の人だかり。

6月

2日に雑技団活動日。腐れコンテナの移動大会。長居公園で打ち上げ。
15・18日 東北遠征のための取材と南三陸勝

7月

27・28日 宮城県南三陸町遠征。団長、とり団員、久保団員、高濱団員、玉置団員、藤原幸一さん、西澤雅子さん、小川幸子さん、向井康夫さん、鈴木卓也さん。ニジ団員も参加。ギョリュウをテーマにした歌津コミュニティ図書館でのワークショップと、地元で催された「子ども自然史ワークショップ2013」のお手伝い。参加者は27日が51名、28日が93名でした。

8月

8・9日 宮城県南三陸町遠征。東北大学総合学術博物館の体験活動「南三陸町は魚竜化石の宝庫」団長が講師で参加。子どもたちと化石を掘り、その化石と子どもたちの絵をつかって、歌津のコミュニティ図書館に隣接する施設「平成の森」に小さな展示を作るイベントでした。

25日 鹿児島県「生命と環境の学習館」へ遠征。子どもたちに手羽先ワークショップ。鹿児島在住の川上団員の呼びかけで骨格標本づくりを教える。行きはフェリーで、帰りは飛行機で帰ってきました。団長、乾公正団員、佐竹遊沙団員、佐竹倫太郎団員、浜口とり団員。

南三陸町 子ども自然史ワークショップ 2013

7月28日(日) 9時～13時
08月14日(日) 9時～13時
南三陸町立総合文化センター
大ホール・多目的ホール・自由ホール

【南三陸ネイチャーセンター友の会】
南三陸町南三陸町で、地域の自然の中で、それ長くとこした教育活動などを行っている。「南三陸町総合文化センター」のより良い場での開催を実現・実現する団体です。
センターがやっている講座・研修の開催、"夏休み"などの自然教育プログラム、体験型プログラムの開催などを行っています。
南三陸町を中心とし、研究や研修、博物館運営など、様々な人が参加して、誰でも参加することが出来ます。
南三陸ネイチャーセンターの店
www.nsanriku.jp
みんなでがんばろう5●日本

主催：南三陸ネイチャーセンター友の会
後援：南三陸町教育委員会・南三陸町観光協会
協力：南三陸ホテルリゾート・NPO法人大版自然史センター

ホソウラギョリュウ (1952年に発見)
ワタツワルス (1970年に発見)
クダハマギョリュウ (1985年に発見)
4種目の魚竜? (2006年発見、2013年6月29日 日本古生物学会で発表)

7月27日(土)
歌津コミュニティ図書館・魚竜 & 平成の森 大会議室
12:00～16:00 **無料**

このじかんのあいだ、ずっとやっています。いつでもきてね。

主催：NPO法人大版自然史センター 後援：南三陸町教育委員会
協力：東北大学総合学術博物館・南三陸ネイチャーセンター友の会
大阪府立自然史博物館 saveMLAK・西日本自然史博物館スタッフ有志・なにわホネホネ団
問合せ：NPO法人大版自然史センター (西澤)
電話：06-6697-6262 nishizawa@mus-nh.city.osaka.jp

この行事は独立行政法人環境再生及び整備機構地球環境基金の平成25年度特別助成金を受けて行われます。

南三陸町 自然史博物館

2011年1月～2011年4月に入団試験に合格した方々です。

新入団員紹介

●団員 No.249 三浦カオリさん

●団員 No.250 木村友紀さん

●団員 No.251 浅田暢夫さん

●団員 No.252 松月康さん

●団員 No.253 辻本篤さん

●団員 No.254 田中夏樹さん

●団員 No.255 植村明都さん

●団員 No.256 芦沢桃子さん

●団員 No.257 小林仁さん

お名前： カオリ

入団試験はラスカル!
カホリがなかなかに「カ」が得意で手
がプルプルします。
手はよくが大変でしたがやりがい
ばあーの Thank you!
Dank shun! Meru Genshou!

お名前： 木村 友紀

鹿がいる大学で、理科教育について
勉強している大学生です。
動物が好きで、最近では寄生虫にも
興味があります。
よろしくお願いします!!

お名前： 浅田 暢夫

福井県の小説から来ました。
ふんは、会社員としていまも、
言葉を環遊のモ、大好きなので、伊夏の作
品をつくっています。名前を校正していいかと
いくつか作品を見せたいと思います。あかあかの
ホネホネ団の団員の名に恥ぢぬように
がんばります。

お名前： 松月 康

とあるペットフードメーカーで営業をして
おります。ホネが好きで、宝物は知床
で昔 Get したエゾジカの頭骨です。
いっせいで全身の標本が作れるとS...の
腕をみかきたいです。

お名前： 辻本

とりが好きなので
たくさんみかんきしたいと
思っています! よろしくお願ひします。

お名前： 田中 夏樹


大阪府立大学で獣医師の研究生を
やっています。病理解剖とやり方が
かなり違っていて 初心者同然ですが
どうぞよろしくお願ひします。
動物物が好きで牛や魚、ヤスナズミ
がお気に入りです。

お名前: 植村 明都
 何度も見学に来させてもらっていて、
 「うやく! 念願の入団! となりました。
 これからよろしくお願ひします。
 大阪府立大学で獣医学と勉強して
 います。今、5年生です。
 動物園、水族館、そしてもちろん、
 ホネホネ団も大好きです!!

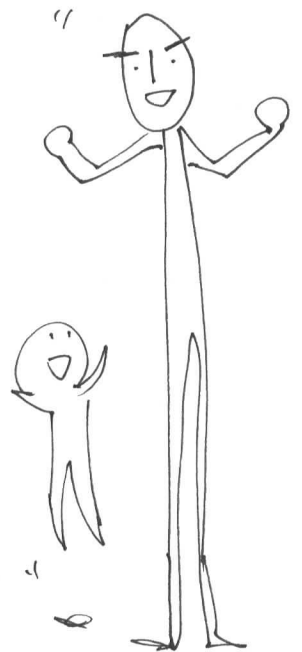
おめ
 ーで
 ーう!
 ーに
 ←ウサギ
 もらったこと
 ありがとう..

お名前: 茅沢 桃子
 虫ヒガイコツカ!
 大好きです。
 よろしくおわがイコツ
 いたしまスカル!

いたしまスカル!
 ンゴッ

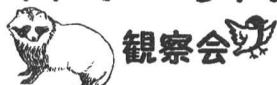
お名前: 小林 仁
 ポンポコ...

 巨樹専門の
 植木屋です。
 鯨を乗せにい
 ています。
 カ仕事は
 おまかせ!!

← ホネホネ団史上
 最大団員!!
 190cm超え!
 何してもらおう...



いま入会すると 秋のイシイ行事に参加できるよ~
博物館の楽しみはホネだけじゃない!!
友の会に入ろう

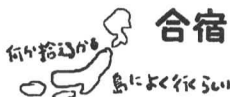
ナイトミュージアム



観察会

バックヤードツアー

合宿!!



島にぶつかる

会員限定の行事も
 たくさん!!
 入って損なし!



1年間3000円で
 家族全員
 楽しめます!!

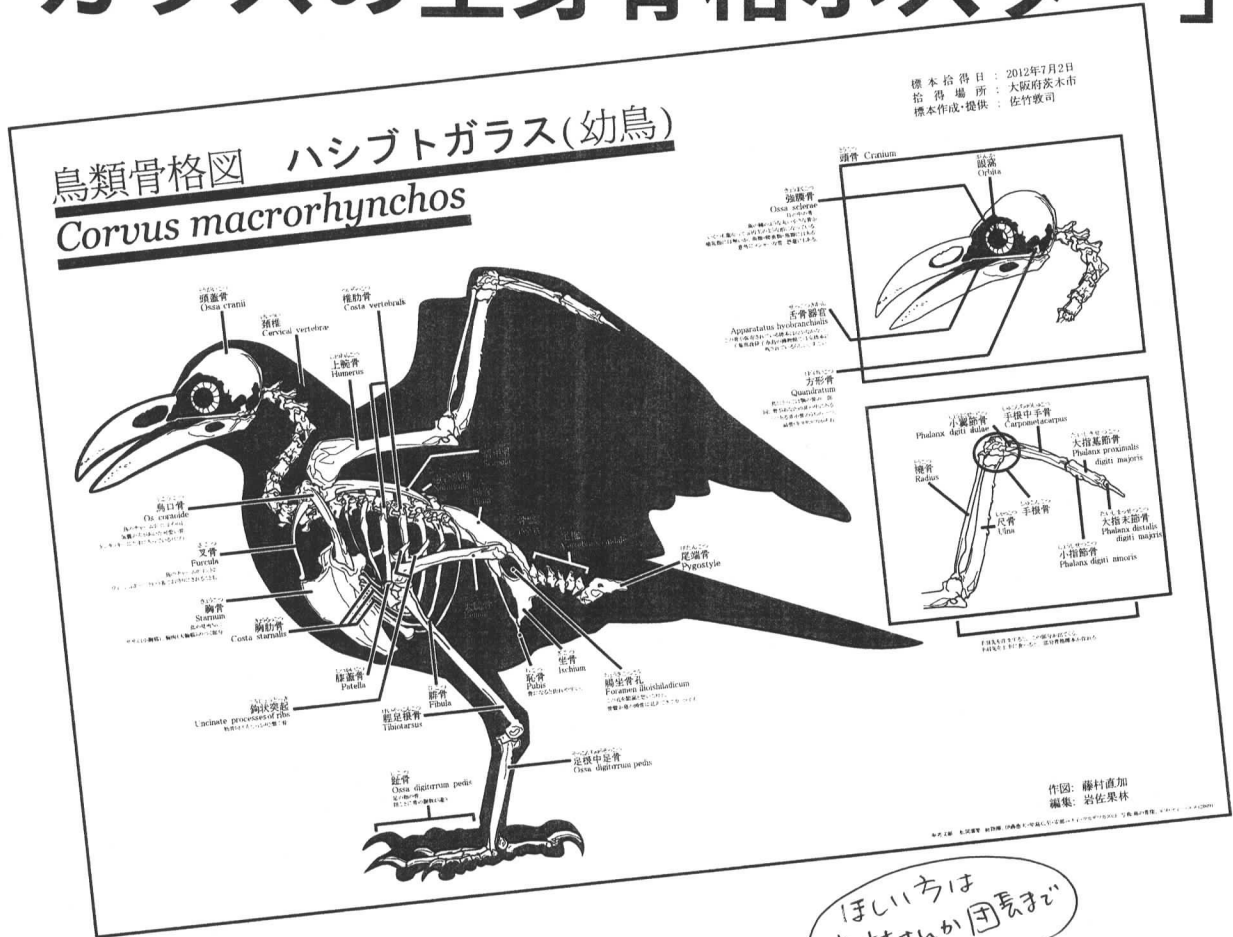


一家に一枚、いや一部屋に一枚



広告

「カラスの全身骨格ポスター」



いつも見える場所にはって
鳥の骨の名前を覚えよう!

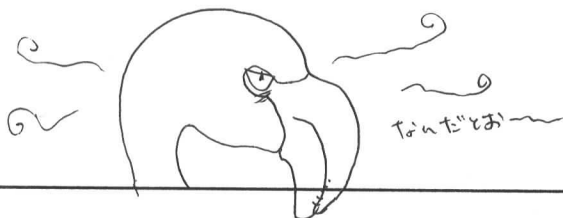
ほいっじゃあ?
藤村さんの団長が

お手軽B2サイズ
1枚1,000円

懺悔の部屋

衰れた姿になった標本にごめんなさいするコーナー

8月17日の鳥の日に剥いた(？、動物園から来た子なのですでに半分剥かれていましたが…) チリーフラミンゴさんの脛骨を骨折させてしまいました… 多分、踵までの腱をできるだけ出そうとふくらはぎの筋肉の上の端と下の端がホネに固定されたまま引っ張ったことが原因なのかな?と思います。体重のある子ですし、ホネもしっかりしていると思ったのですが、折れた面を見ると厚みが1mmもない?中空の筒状になっていました… と、ごちゃごちゃいう前に!! 事務局長大切な標本を破壊してごめんなさい!! それよりなによりフラミンゴさん、骨折させてしまってごめんなさい!! 今後気を付けます!!



矢田部 典子

— 縁無き衆生・迷える子羊募集中 —

活動日にやってしまった失敗を気に病んでいるあなた。
ホネ通で懺悔して楽になりませんか?

だいちょうどし nishizawa@mus-nh.city.osaka.jp

短歌

岩坪幸子

「なにわホネホネ団」

・動物の解体をするホネ団に

集う人らはみな嬉々として

・疥癬の狸ザラザラ皮膚となり

ぐったりとしてされるがままに

・皮を剥き内臓を出し丁寧

教えてもらう人も同じか

・若者が東北支援を続けゆく

熱きパワーは周り巻き込み

・こだわって地元の化石ゴム判に

ワークショップの材料とする

ホネホネ団 活動の中心 うれしかった
作品はぜひ通信部編集部へ



レシエかも いいかも

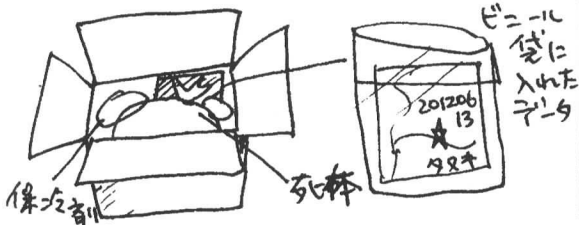
なにわホネホネ団からのお願い

死体は重要な標本です。ぜひ回収して博物館まで届けてください。届けるときにはビニール袋で3重ぐらいに包んでください。直接持ち込むほか、冷凍の宅配便も利用できます。着払いでも結構です。その際、内容は「標本」「サンプル」とお書き下さい。

送ったり、持ち込んだりするときには、ホネホネ団まで連絡をください。標本の採集日、採集場所（地図のコピーに印でOK）および採集者の名前を書いたメモを同封することを忘れなく！

お問い合わせ先

大阪市立自然史博物館
<http://www.mus-nh.city.osaka.jp>
 動物研究室 和田学芸員
 wadat@mus-nh.city.osaka.jp



— 好評発売中！ —

『獣の標本作成ガイド 解剖編』

～道ばたから収蔵庫まで～

団長 西澤真樹子 著

2005年刊 37ページ

簡易製本 価格 250円

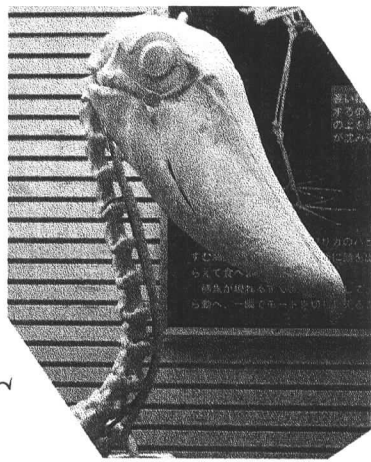


編集後記

記事募集

ホネホネ団はなんと今年で10周年！編集子にとってもホネホネ団に出会ってから5周年と節目の年です。年表をみるとあの時「小さい自然フェスタ」で見たハセイルカの骨格標本は初お目見えだったのです。月日の経つのは早いものです。またホネ通の11号から担当しているので、ちょうど10号目とこちらもキリの良い数字です。そろそろ誰か編集を交代してみませんか？楽しいですよ。

今号は10周年記念ということので、ページ数を気にせずにつぶりを盛り込みました。他にも「10周年おめでとうのイラスト募集」とか団員番号一桁の皆さんに取材とか考えていたのですが、実現できませんでした。他にも我孫子の鳥の博物館で「鳥の骨展」を見学したので、その記事も書くかと思つたのですが、それは次号のネタにとつておくことにしました。でもちよつとだけ、骨格標本をチラッと紹介します。



ホネホネ団通信では、常に原稿を募集しています。原稿用紙半分程度の短いものから超大作まで幅広く受け付けています。手書きでもパソコンでもOK、イラストや写真もありです。投稿方法は電子メール、博物館へ郵送したり持っていく、活動日に手渡しなどです。送料や交通費は自己負担でお願いします。内容はホネに関する全般ですが、例えば：活動報告・活動日にこんな作業をした、ホネホネ団の活動でどこかに行った、ホネを見に行った、死体やホネを拾った、入団試験を受けたなど、何かしたら記事を書いてください。私物標本・個人で色々拾ったり組み立てたりしている方も多いと思います。拾ったホネ、組み立てたホネ、組立中のホネ、ホネにする予定の死体など、何か持っていたら写真とエピソードを寄せてください。

本紹介・ホネに関する本を紹介してください。読書感想文の宿題が出たら、ホネに関する本にして、ホネホネ団通信にも送ろう！

他にも編集から色々記事を依頼しますので皆様よろしくお願いたします。

作成の手間を省くために原稿の校正を編集が勝手にしています。大幅変更は投稿者に確認しますが、内容が変わらない程度であれば通知しないことがあります。

ホネホネ団通信編集 佐竹敦司
 gcd03100@nifty.ne.jp